

明日に生きる

—作文コンクール入選作品集—

第34号



令和5年度



東京都産業教育振興会

表紙デザイン

この絵は人と人との一生の関わりを表現しました。人は一人では生きていけません。生まれてから死ぬまでの間、何百・何千・何万の人と関わり合って生きていきます。そんな一生を絵に表現しました。生きていく上で他者と関わることの重要性、頑張って何かをつかみ取る喜び、新たな命への感謝。沢山の支えと感情に揺さ振られる人生を大切にしていこうという思いを表現しました。過去から未来へとつながっていくその一生を大切にしていこうと思いました。

品川区立鈴ヶ森中学校

9年 宮田優璃

明日に生きる

第三十四号

— 作文コンクール入選作品集 —

明日に生きる ― 作文コンクール入選作品集 ― 第三十四号 目次

講評

ページ

作文選考を通じて

中学校の部

選考委員長(世田谷区立三宿中学校長)

濱川一彦

1

作文選考を通じて

高等学校・専修学校等の部

選考委員長(東京都立橘高等学校長)

深澤栄次

2

中学校の部

ページ

最優秀賞

料理が教えてくれた大切なこと

江戸川区立二之江中学校

三年 岩崎海春

4

優秀賞

わくわくを追いかけて

墨田区立両国中学校

二年 田嶋玲奈

5

優秀賞

周りの人を笑顔にする物づくりの喜び

北区立稲付中学校

三年 二村一颯

6

優秀賞

「仕事」の本質

東京都立大泉高等学校附属中学校

二年 大場美遥

7

佳作

将来のものづくりに向けて

墨田区立両国中学校

三年 尾形優太

9

佳作

職場体験で得た学び

墨田区立両国中学校

二年 細田晴香

10

佳作

選択を正解にする。

世田谷区立三宿中学校

三年 檜野莉穂

11

佳作

見えない仕事の大切さ

中野区立中野中学校

二年 藤田晴

12

佳作

言葉

中野区立中野中学校

二年 山崎彩花

13

佳作

身近にいる大切な存在

北区立稲付中学校

三年 古本彩心

15

佳作

努力

北区立赤羽岩淵中学校

三年 井出雫

16

佳作

二〇三〇年を創る私たち

北区立赤羽岩淵中学校

三年 川俣光紗

17

佳作

将来の夢

北区立赤羽岩淵中学校

三年 小林未唯

18

佳作

ものづくりと豊かさ

北区立赤羽岩淵中学校

三年 松本晏佳

20

佳作

働く意味

荒川区立南千住第二中学校

二年 荒井識月

21

佳作

新たな私への第一歩

足立区立江南中学校

二年 内池明陽

22

高等学校の部

佳	作	私と食事	足立区立伊興中学校	二年	小林桃々	23
佳	作	「技術」と「発電」	江戸川区立松江第四中学校	三年	寺門寿菜	24
佳	作	未来の自分へ	調布市立第八中学校	二年	加藤大知	26
佳	作	父から学んだこと	調布市立第八中学校	一年	小林柚葉	27
佳	作	ものづくりの基本	町田市立真光寺中学校	三年	堀江真広	28
佳	作	すべての仕事にやりがいがある	東京都立大泉高等学校附属中学校	二年	島田純	29
最優秀賞		成人看護実習で学び得たこと	愛国高等学校	三年	浪打優	32
優秀賞		現場で考え学びに向きあう	東京都立農産高等学校	三年	小林漣	33
優秀賞		生き物を守るために	東京都立農業高等学校	二年	大里優羽	34
佳	作	わたしのしょうらいのゆめ	東京都立園芸高等学校	一年	ユスフィナシファ	35
佳	作	農業の魅力	東京都立農芸高等学校	二年	林咲希	36
佳	作	考えつづけて変えてく未来	東京都立農産高等学校	三年	今本静穂	38
佳	作	インターシップを通して学んだこと	東京都立農業高等学校	二年	上田愛花	39
佳	作	喜び合うことに必要なこと	東京都立農業高等学校	二年	蟬平菜月	40
佳	作	幸せを届ける職業に向かって	東京都立農業高等学校	二年	中原萌音	41
佳	作	養豚体験の価値を届けたい	東京都立瑞穂農芸高等学校	三年	下田緩乃	43
佳	作	私が目指す新しい酪農の形	東京都立瑞穂農芸高等学校	二年	吉田穂乃里	44
佳	作	心をつなぐ老人ホームでの職場体験	東京都立瑞穂農芸高等学校	一年	陶浩太	45
佳	作	ニワトリと私	東京都立瑞穂農芸高等学校	一年	竹内ひかり	46
佳	作	私の将来	東京都立第三商業高等学校	三年	小木曾南	47
佳	作	新しい夢との出会いを	東京都立赤羽北桜高等学校	二年	稲葉真琴	48

専修学校の部				
佳作	何より大切なこと	東京都立赤羽北桜高等学校	二年	佐々木心那
佳作	将来の夢	愛国高等学校	三年	昆野里音
佳作	私の夢	愛国高等学校	三年	谷口なご美
佳作	理想の鉄道員を目指して	岩倉高等学校	二年	福原優和
佳作	私の学びと夢	昭和第一学園高等学校	三年	渡邊悟
				ページ

イラストの部				
優秀賞	私になりたい将来像	青山製図専門学校	一年	間真子
優秀賞	私の目指す道と思	青山製図専門学校	一年	山本駿介
				ページ

最優秀賞		品川区立鈴ヶ森中学校	九年	宮田優璃	59
優秀賞		品川区立鈴ヶ森中学校	九年	若井佐和子	59
優秀賞		江戸川区立二之江中学校	一年	前原椎花	59

令和5年度作文コンクール応募校等一覧（応募者数・入選者数）

応募校数・応募者数・入選者数の推移

作文のテーマ別応募者数一覧

令和5年度作文コンクール募集要項

令和5年度作文選考委員名簿

あとがき

表彰式の様子

作文選考を通じて

中学校の部 選考委員長

世田谷区立三宿中学校長

濱川 一彦



といたしました。

今回最優秀賞を受賞した岩崎海春さんの「料理が教えてくれた大切なこと」は、小学校五年生で初めて作った夏野菜カレーや、中学生で作ったシチューに弟や家族の「おいしかったんだもん、おかわりしていい」「すごく美味しそう、帰ったらすぐに食べるね」という言葉に、誰かのために何かを作ることの喜びや笑顔を見ることのうれしさを感じられたとありました。そして、将来の仕事も人を笑顔にでき、幸せを誰かと一緒に感じられる仕事に就きたいと綴っています。さらに普段からマイナスイメージになるような発言をせず、「ありがたいと、ごめんなさい」が意識しなくても言える自分でありたいと日頃の言動にも意識を高めることができています。

優秀賞の田嶋玲奈さんの「わくわくを追いかけて」は、飛行機と青空にわくわくしていた幼い時期から、キャビンアテンダントに憧れ、三歳にして自分の仕事はこれだと考え公言してきたが、保育園への職場体験で二歳の子とのふれあいから、誰かを笑顔にできる仕事をしたいと自分の気持ちに気付くことができ、それが新たなわくわくに変わったと結んでいます。

二村一颯さんの「周りの人を笑顔にする物づくりの喜び」は、小学校一年生の頃に熱中した泥団子作りから、中学の技術の時間のものづくりを楽しいと感じ、アイデア工夫展での銀賞受賞や、弟のために作った定規など、自分の考えたアイデアグッズが多くの人に喜ばれるような商品を将来はつくっていききたいとあり、そんな自分に自由にもものづくりできる環境を整えてくれる家族にも感謝の気持ちを表しています。

大場美遙さんの「『仕事』の本質」は職場体験で訪れた博物館で企画展示に関わったことによる莫大な準備やオリジナリティなアイデアなど、一つ一つ考え決定していくことの大変さの中にも、来場するお客さんが喜んでくれることがなによりも嬉しく達成感を感じるという学芸員さんの言葉から、焦らず何事にも真剣に挑戦していくことが大切とまとめています。どの作品も様々な気つきや家族の暖かさ、出会った方々の考えに触れ、大切なことを若い感性で表現してくれています。

最後になりますが、今年度の「作文コンクール」に応募していただいたたくさんの方々の生徒の皆さん、ありがとうございました。また、ご指導いただいた先生方、貴重な体験をさせてくださった地域・事業所の皆様、そして温かく見守り励ましてくださった保護者の皆様に感謝申し上げます。

作文選考を通じて

高等学校・専修学校等の部 選考委員長

東京都立橘高等学校長

深澤 栄次



今年度は、高等学校の部に百三十一作品、専修学校の部に十一作品の応募がありました。一次審査、二次審査を経て、高等学校の部では、最優秀賞一作品、優秀賞二作品、佳作十七作品、専修学校の部では、優秀賞二作品を選考させていただきました。

高等学校の部の最優秀賞は、愛国高校三年の浪打優さんの作品で、題名は「成人看護実習で学び得たこと」です。

この作品は看護実習の体験を通して患者から言われた何気ない一言に疑問を感じ、周囲の協力を得て、本当の看護とは何かを見つけ、これからも患者様と寄り添うことを決心するまでが書かれています。体験を通して得られた喜びや感動がリアルに書かれていて、とても読み応えのある作品でした。

僅差でしたが、優秀賞は、都立農産高校三年の小林漣さんの「現場で考え学びに向きあう」と、都立農業高校二年の大里優羽さんの「生き物を守るために」の二つの作品です。

小林さんの作品は農作業の想像を絶する大変さと、大変だ

からこそ効率を求めることが大事であり、「農業は脳業である」ことを教えられた体験を切実に書かれた作品でした。また、大里さんの作品は様々な生物が一年間に四万種以上絶滅している状況に危機感を覚え、自身で何ができるかを考え、環境保全のために世界で活躍できる人間になりたいという思いが強く込められた作品でした。どちらも作者の思いが大変強く感じられる作品でした。

専修学校の部の優秀賞は、青山製図専門学校一年の間真子さんの「私がなりたい将来像」と、青山製図専門学校一年の山本駿介さんの「私の目指す道と思い」の二つの作品です。

間さんの作品は、ご家族の働く姿を通して家族への感謝の気持ちや自身の将来の夢を大変熱く語っている作品でした。また、山本さんの作品はモノづくりを通して生まれ故郷に何か貢献できないか、授業での学びを活かすことができないかと深く考察している様子が大変よくわかる作品でした。どちらも現代社会が抱えている社会問題に着目し、自身の問題と捉え、よく考えられている作品でした。

今回の応募作品では、授業等での学びや体験を通して得たことや将来の進路や夢について具体的に書かれており、職業観についても、しっかりと書かれている作品が多く、選考に大変苦労した作品ばかりでした。

結びになりますが、今年度の作文コンクールに応募していただいた皆さんの一層の活躍を期待するとともに、ご指導いただきました先生方に深く感謝申し上げます。

中学校の部



中扉デザイン

この絵は、「私は何にでもなれる」ということを、まだ何色にも染まっていない白色のパーカーで表現しました。また、私たちが夢を追いかけている裏で、たくさんの自然や人に助けられているということを心の片隅に置いて生活して欲しいという願いを込めて描きました。

品川区立鈴ヶ森中学校

9年 若井 佐和子

中学校の部 最優秀賞

料理が教えてくれた大切なこと

江戸川区立二之江中学校 三年

岩崎海春

私の家族は父、母、姉、私、弟の五人家族です。両親は共働きで姉もアルバイトをしているため、夜に弟と二人になることはよくあります。そのような日は私が夜御飯を作っています。この話をするとうちは口を揃えて「かわいいそうだね」と言うのです。ですが私からしたらかわいそうなところは一つもなく、むしろ嬉しいのです。

私は小さい頃から台所に立って料理をする父や母に憧れていました。そんな私が初めて台所に立って料理をしたのは小学五年生の夏でした。夏休みの宿題に御飯作りがあったからです。初めて作ったのは「夏野菜カレー」でした。たくさん食材を切るの難しく、いつも料理をしていた父や母のようにスムーズには作れませんでした。玉ねぎを切っていたら涙は出るし、じゃがいもは大きくて切りにくいので「もうやめたい」と言ってしまうました。すると母は私に「小さい頃はお母さんもスムーズに料理ができなかったんだよ」と言いました。その時私は自分のペースで作ればいいのだと気が楽になりました。

時間をかけて作り、みんなの前に出すと、みんな目をキラ

キラさせて「美味しそう、早く食べたい」と言ってくれました。その時は「またみんなに作りたい」と思い、たくさん料理をするようになりました。

中学一年生になった頃、父と母が仕事で帰りが遅くなることが多くなってきました。ある日は母は私に「今日は帰りが遅くなるから何かスープで買って食べてほしいな」と言いました。その時は無意識に「それなら今日の夜御飯私に作らせてよ」と言っていました。驚いた母は目を丸くしながらも「それなら今日はシチューとサラダをお願いできる?」と聞いてきました。私は母に頼られたことが嬉しくて「もちろん」と大きな声で返事をし、料理を始めました。

一時間が経ち、全ての料理が完成して弟の前に出して、使った道具の片付けをしていると、いつもより早く食べ終わっていました。「そんなに早く食べるとお腹こわすよ」と言うのと、弟は「だって美味しかったんだもん。おかわりしてもいい?」と聞いてきました。にんじん嫌いな弟がお皿に残すことなく食べ、おかわりしたいと言うのです。その時は初めて、御飯作りをしてよかったです。作った御飯の写真撮り、メールで母に送ると、仕事の休憩中だった母から「すごく美味しそう、帰ったらすぐに食べるからね」と返ってきました。

中学三年生になった私は今でも御飯作りをしています。御飯作りを通して誰かのために何かを作ることの喜びや笑顔を見ることの嬉しさを感じられたからです。最近祖母から教わった宮崎県の郷土料理「チキン南蛮」も作れるようになりました。

私の将来の夢はまだ迷っていて決められていません。ですが小学生の頃から続けている御飯作りで感じたように、人を笑顔にできたり、幸せを誰かと一緒に感じられるような仕事に就きたいと思っています。そのために、日頃からマイナスイメージになるようなことは言わないようにしたり、「ありがとう、ごめんね」などの言葉が意識しなくても言えるようにしたいです。

なぜ私は両親や姉がいないときに御飯を作るのが嬉しいのか、その理由は誰かに頼られることが嬉しいのと、御飯作りにはやりがいを感じられるからです。

中学校の部 優秀賞

わくわくを追いかけて

墨田区立両国中学校 二年

田嶋 玲 奈

幼い頃から飛行機が大好きだった。少しせまい座席。上空に上がっていくほど晴れわたる空。飛行機には、私にとって何にも換えがたい「わくわく」がつまっていた。そんな「わくわく」な飛行機で、私が最も魅力を感じたのはキャビンアテンダントだった。笑顔で颯爽と働く姿、華やかな制服は憧れの対象となった。キャビンアテンダントという職業を志すようになるのに時間はかからず、三才の頃にははっきりとし

た夢になっていた。

それから十年、中学二年になった頃から、私はキャビンアテンダントになるという夢に対して疑問を抱きはじめて。入塾するための面談に行ったときのことだ。塾長の先生に、

「将来の夢はありますか。」
と尋ねられた。

「はい、キャビンアテンダントになることです。」

将来の夢をきかれたときは、何年も前からそう答えていたので、その言葉が口をついて出た。しかし、そこでふと思った。今、私は私になりたいと思ったからキャビンアテンダントを夢として答えたのだろうか。昔からずっと、そう答えてきたから、今もまたなんとなくそう答えているだけなような感じがした。今の私にとって、それが本当にやりたことなのだろうか。私はまだ中学生だ。進路は今なら無限大の可能性がある。今が将来について考えなおすタイミングなのではないのだろうかと思った。

ちょうどその時期、職場体験の体験先の希望調査表が配られた。この職場体験を通して、何か将来に向けたヒントが見つかるのではないだろうか。そう考え、悩みに悩んだ末、第一希望を保育・教育の分野にした。小さい子どもがもともと好きだったからだ。この職場体験という絶好の機会を、将来に役立てないわけにはいかない。この体験を通して、自分をワンランク成長させたい。そう強く感じた。

体験先が保育園と決まっただけからは毎日、体験学習を有意義なものにするための準備をした。小さい子どもに関する本を読んだり、授業外でもマナーや正しい敬語について調べたり

した。

事前訪問も無事に終え、迎えた体験一日目。

「子どもたちと遊んであげて下さい」

とだけ担当クラスの保育士さんに伝えられ、私は二オクラスの教室の中央に立った。よし、いよいよ体験学習が始まる。意気込んで周りを見まわした。すると、近くにいた男の子が、

「お姉さん、遊ぼう」

と声をかけてくれた。ついていくと、その男の子は毛糸の糸くずをたくさんお皿を渡してきた。

「これはね、パスタだよ、お姉さんが食べて」

そう言われたので、食べるまねをして、

「とってもおいしいね」

と伝えた。すると男の子は満面の笑顔で、

「もっとあげるね」

と言ってくれた。そのとき、私の中でとてつもなく大きな嬉しさがこみあげてきた。これだ、と思った。私は、誰かを笑顔にできる仕事をしたい。そう気がついた。

まだこれからの進路は未定だ。だけれども一つ、私は職場体験で新たな目標を手に入れた。

私は人を笑顔にできる仕事をしたい。自分がしたこと誰かが笑顔になってくれたときの喜びは、今の私にとって何よりも大きな「わくわく」になった。誰かを笑顔にできる仕事に就いて、もっとたくさん「わくわく」を感じることに。これが私の将来の夢だ。

周りの人を笑顔にする物づくりの喜び

北区立稲付中学校 三年

二 村 一 颯

私は、小学一年生の頃に泥団子作りに夢中になった事がある。泥団子の作り方は、赤土を丸く固めて、ふるいにかけて砂で周りをコーティングする。それを柔らかい布でひたすら磨き、乾かす。これを何日も繰り返し行う。そうする事で、土とは思えない程の光沢と硬さが生まれ、まるで宝石のようにも思えてくる泥団子が完成する。

私は、初めから完璧な泥団子を作れたわけではない。何度か失敗を経験した。一番重要なのは土選びであった。友達と色々な場所の土を探し、最終的に赤土にたどり着き、ヒビ割れの無いキレイな玉を作れるようになった。

乾燥する上では湿度の影響が大きい事を学んだ。雨が雨の日には表面をこすっても光沢が出せず崩れの原因になり、乾燥させ過ぎても表面がポロポロと剥がれてしまう。

これらの事を踏まえ、一ヶ月以上かけて磨き続けて、ようやく満足のいく泥団子が完成した。友達と試行錯誤をして、時には失敗して慰め合ったりしながら作った第一号の泥団子は、友達との絆も詰まった大切な宝物になった。

私は中学生になり、物づくりのできる技術の時間が好きになった。ある日、技術室にあるピカピカのアルミ玉を見て心が弾んだ。そこから私のアルミ玉作りが始まった。

他にも石槍、割り箸鉄砲なども、作ってみた。物づくりの楽しさは技術の時間や遊びを通して経験してきた。そして完成したのを見て褒めてくれる家族を見て、物づくりの喜びを知った。そしてこれからは皆の役に立つ物を発明して、周りの人を喜ばせたいと思うようになった。

以前、「光るカサ」という物を作った。配線など難しい部分は祖父に教えてもらい、夏休みに完成させた。ある日、学校から連絡がきて、私の発明したカサがアイデア工夫展で銀賞をもらったという知らせを聞いた。とても嬉しかった。

そのカサは、のちに誰かの手によって商品として販売されていた。私と同じような事を考えて、実際に商品化をし、便利だと思った人が購入をしている。その事は、私にとって、とても自信につながった。これからもアイデアを出し続けて、いずれは自分の力で商品化につなげて、「世の中を便利にしたい」と思うようになったきっかけの出来事であった。それから私の物づくりは続いた。

私の弟は、教科書を読んでも、どの行を読んでいるのか分からなくなり、行を飛ばしたり、途中で止まったりしてしまう。そんな弟を助けてあげたいと思って作ったのが「行を間違えずに読める定規」だ。

これを試した弟は、スラスラと読めることに喜んで、何度も読み聞かせてくれた。私は、弟の喜ぶ姿を見て嬉しかった。それと同時に、生活で不便を感じていることを、少しの工夫で便利に変える、「アイデアグッズの発明」の仕事に興味があった。アイデアを形にしてくれる会社、その方法なども色々ある事が分かった。

私は、泥団子作りから始まり、物作りを通して、最終的には「人が喜ぶ商品を作りたい。」と思うようになった。

こう思えるまでになったのは、技術の授業がとても楽しかった事や、私の家族の協力があつたからだと思う。ペランダを砂まみれにし、石の破片や散らかった工作を許してくれた母。私が欲しいと思った黒曜石をネットで注文してくれた父。思う存分に物作りに熱中できる環境を整えてくれた家族や物づくりの楽しさを教えて下さった先生に感謝しつつ、これからも自分のアイデアグッズで家族の笑顔を増やしたり、更には、自分のアイデア商品で世の中を便利にしたいと思った。

「仕事」の本質

東京都立大泉高等学校附属中学校 二年

大場 美 遥

「今私は、このお仕事をしています、とっても楽しいです。」職場体験で聞いたこの言葉は、私の「仕事」への印象を大きく変えた、とても衝撃的なものだった。

私は職場体験で、博物館を訪れた。そこは日本の歴史や伝統文化、また地域の歴史や伝統文化を扱う場所で、職員の方々とお客さんの距離が近く、ボランティアとして活動して下さっている方もいる、とても温かい雰囲気職場だった。私が訪れたときは、博物館の近隣の地域にゆかりのある小説家

について企画展示が行われており、企画から展示するまでの準備に携わった学芸員の方にお話を伺うことができた。

企画展示は、様々な人からの寄贈をきっかけに始まることが多い。このときの展示も、小説家の子孫の方から管理しきれなくなってしまう遺品を譲り受けたことが、展示開催のきっかけとなっている。遺品を貰った時点では約千点の品があり、そこから四百点ほどに絞った。これは、保存状態や展示の内容の分かりやすさなどの観点から選ぶとおっしゃっていた。その後、展示室の構成や明るさ、照明を決め、広報用のパンフレットにもこだわり、ようやく展示が完成する。この企画展の場合は、数年の間温められ、満を持して世に出されたものだという。

その展示は一か月のものだったが、裏には、数年間の努力が隠れていた。展示のアイデアを見つけることは難しく、文献を調べ、展示品の選定をするには、膨大な時間がかかる。また、すぐに展示が形になるわけではないため、地道な努力が必要なようだ。

私は体験の中で、展示の企画立案を行った。アイデアにはオリジナリティが求められ、とても難しかった。もちろん、既に博物館で常設展示がされている内容の丸写しでは、お客さんに興味をもってもらえない。また、お客さんに来てもらえなければ、何も伝えることができないため、キャッチーなものを考えなければならぬ。それに加え、博物館のコンセプトにも沿うことが必要だった。展示のテーマを決めるだけでも考えることが多く大変だと分かった。これを「仕事」として行っている学芸員の方を尊敬すると共に、企画立案の後

にある作業のこと考えると、「仕事」は大変だ、という世間の言葉にも納得がいった。

学芸員の方はこのようなことをおっしゃっていた。確かに、学芸員の仕事は見えない努力が必要で、とても大変だ。しかし、自分の好きなこと、自分がいいなと思ったことについて、突き詰めて調べていくことができるのはとても楽しい。また、それをお客さんに伝え、共有できること、そして喜んでもらえることが、何よりも嬉しいのだ、と。

私は「仕事」にマイナスのイメージをもっていた。辛く、面倒だが、生活に必要なお金を稼ぐため、しなければならぬもの。「仕事」は嫌なものだと思っていた。確かに「仕事」には、マイナスな一面もあるのかもしれないが、それだけではない。「仕事」は、自分の興味のあることをとことん追求し、その魅力を多くの人に伝えることなのではないだろうか。好きなことを追求する楽しさ、展示をお客さんに見てもらい、魅力をわかってもらえたときの嬉しさ、達成感。これが「仕事」のやりがいであり、本質なのだ。私は職場体験を通して、そう思った。

私はまだ、将来どのような職業に就きたいのかはつきりしていない。周りの友達も、将来の夢に向かって頑張っているのを見て、内心焦っていた面もあった。しかし、焦る必要はない。今は、様々なことに挑戦し、何事にも真剣に取り組む。そうしながら、ゆっくり自分が興味をもつためのめり込むことができることを探す。これがきつと、将来の仕事にも繋がっていくのだ。そうやって出会った仕事は、私の未来をきつと明るくしてくれるはずだから。

将来のものづくりに向けて

墨田区立両国中学校 三年

尾形 優太

私はものづくりの街、墨田区に住んでいる。墨田区は江戸時代から続く伝統工芸の技を継承する職人も多く、私の家のすぐ近くには、お神輿などにも使われている鋳金具を作る有名な職人さんもいる。また、保育園の頃には卒園制作で、葛飾北斎の大作「鳳凰」を大きな屏風絵として模写をする体験もした。小さな頃から身近に伝統工芸があったり、ものづくりの経験を重ねてきたことで、自然にものづくりに携わる仕事に就きたいと考えるようになってきた。ものづくりには、自分の中にある思いやイメージを表現する楽しみがあるし、周囲の人に喜びを与えることもできる。

そんな漠然とした考えをもっていたが、今年中学三年生になり、自分の進路や志望校を決める時期となった。高校の普通科で勉強することも考えたが、ものづくりへの興味が強くなり、少しでも早い時期から経験をしたいという思いが大きくなってきた。高校を調べていると、ものづくりの技術が学べる高校があるとがわかった。その高校というのは都内でもたった一校しかないようだ。この高校では専門的な五つの学科があり、自分が入った科で三年間同じメンバーで技術を学

んでいくそうだ。自分がやりたいと思える経験が高校でできることはとても魅力的で、夏休みに行われた学校見学会にも参加をしてきた。

学校見学会ではアートクラフト科、マシンクラフト科、インテリア科、グラフィックアート科、デザイン科の五つの科の高校生が色違いの作業服を着て学校や学科の説明をしてくれた。全員が作業服を着ていて驚いたが、毎日ものづくりをしているという印象を受け普通の制服を着ているより、私にはとても格好よく感じた。各科の高校生は、自分たちの作品や取り組んでいることを、活き活きとした表情で自信をもって教えてくださり、高校生活が充実している様子も感じた。全体の説明の後は各科を見学したが、高校生が作った数々の作品が廊下に溢れており、そのクオリティにとっても驚いた。デザイン画、彫刻、木工作品の椅子など、とても精密に作られており、今まで中学校では見ることのないレベルだった。私はものづくりが好きだが、美術が特に得意でもないのので、自分でもやっていけるのか少し不安に感じたが、高校生が「基本から教わることができるので大丈夫だよ」と声を掛けてくれたので頑張っていけそうだなとも思った。高校生たちは将来やりたいことや夢を実現するために、日々多くの課題に取り組み、知識や技術を身に付けていることも教えてくれ、大変だけど充実しているということも話してくれた。

ものづくりは基本を身に付けることがスタートで、その後多数の技術を習得した上で、自分が表現したい題材や手法を選び、時間をかけじっくり練り上げていく取り組みだ。高校見学を通じて、自分が満足できる作品も簡単には生み出せな

いということも改めて感じた。ただし、自分の手で仕上げた作品を世の中に届け、誰かに使ってもらったり、自分の表現を良いものだと感じ喜んでもらえることは、ものづくりの最大の魅力だと改めて思った。私は体験会でインテリアのデザイン制作を経験したが、自分のデザインした家や部屋で快適な住環境を生み出すことにも興味をもった。将来、こういったものづくりに取り組んでいくのか、まだ決め切れてはいないが、今は一生懸命勉強に取り組み、この高校へ進学したいと強く思っている。そして、多数の技術を身に付け、便利や心地良さを、機能性や快適さなど、誰かのためになるものづくりの一端を担えるようになりたい。

職場体験で得た学び

墨田区立両国中学校 二年

細田 晴香

七月、二年生全員で職場体験に行くことになりました。私は保育、教育の職業から児童館に二日間行くことになりました。

職員と顔合わせの時。クラス関係なく職員は構成されます。立候補をして私は副班長になりました。班長より仕事は無いですがサポート等を頑張りたいと思いました。

職場体験初日。児童館で縁日があるので、午前中はその準備をしました。風船を沢山ハンドポンプで膨らますのが仕事

です。初めは縛るのが難しく苦戦しました。けれど作っていくうちにコツを掴んで、すぐ縛れるようになりました。その他にも掲示物をはがしたり、縁日の手紙を三つ折りにしたりするなど事務的な作業が多くありました。

二日目も午前中は、屋上で縁日の準備です。日よけをブルーシートで作ったり吊るしたり、太陽が照りつける暑い中での作業がありました。そのためエアコンの効いた涼しい部屋に行きたいと何度も思いました。作業中、職員の方になぜこの仕事に就こうと思ったのか聞いてみると、子供たちの笑顔が見たくて児童館の職員になったとおっしゃっていました。常に子供たちのことを考えながら、一つ一つの作業に一生懸命取り組んでいる姿に感化されました。最後まで作業をやりとげることができ、達成感を感じることができました。

最終日、午前は乳幼児と関わりました。職員の方に接し方が上手だと褒められたので嬉しかったです。乳幼児の子皆が目がキラキラしていて、とても癒しになりました。

三日間午後は全て小学生や学童の子と遊ぶ時間でした。ドッジボールをしたり、ぬり絵をしたりと楽しかったです。最後に手紙をもらいました。私の名前を覚えていて書いてくれた子がいたので嬉しかったです。

館長に質問する時間がありました。その時に分かったことがいくつかあります。

一つめは、SDGsに関連して



取り組んでいることが沢山あるということです。使い終わったペットボトルのキャップや歯ブラシ、油の回収をしています。油の回収は聞いたことがなくて知りませんでした。使い終わった油を業者の人に渡して、肥料や工業用石けんなど新たな資源に変えるそうです。油が再利用できると知り驚きました。その他にもLGBTの本や外国の本を図書室に置いたり、学童のおやつで苦手な物があったら初めから少なくして食品ロスを防ぐなど、様々なことに取り組んでいて感動しました。

二つめは、子供に関わる全てのことに協力していることです。今回のように職場体験や、地域の人に児童館に来てもらう為のプロジェクトなどを積極的に行っていきます。もし元気がない子供がいたら地域や学校の人に聞いて情報収集したり、乳幼児を二時間程度預かって親が家でリフレッシュできる時間を作っています。学童の子を預かることも親の就労支援につながっています。子供から大人まで安心して利用できる児童館だと思えます。私は初め、児童館は子供だけが遊んだり過ごせる場所だと思っていました。けれど大人も利用できる場所だと知り、新しい発見になりました。

今回私は職場体験を通して沢山の学びがありました。作業を終えた時に感じられた達成感や、楽しかったというポジティブな疲れができたことが忘れられません。本当に充実した三日間になりました。これから学校生活で何か仕事があった時、職場体験での経験を活かして、責任をもち積極的に取り組んでいきたいです。

選択を正解にする。

世田谷区立三宿中学校 三年

樫野莉穂

私の将来の夢は、大きな舞台で自分の音楽を伝えることです。しかし、ただ好きという気持ちだけでは、好きなことを仕事にはできないと思います。そこで私は、この夢を叶えるために、どのようなことをしたら叶えることができるのかという作戦を立てることにしました。

一つめは、言葉です。私は、よく母から「言葉は言葉」と言われることがあります。ネガティブな言葉を言えば、その先は暗いだけかもしれないけれど、ポジティブな言葉を言えば、良い事か悪い事の二択に増えると私は思います。要は気の持ちようで変わるといことです。これは、これからある受験にも言えることだと思います。「絶対無理」や「この問題難しい」と思うと自分ではできないというラインを自分で引いてしまい、解くことができず、最終的には、自分の行きたくった学校に行くことができなくなると思います。私は、ネガティブな言葉を言ってしまいがちな性格です。この「言葉は言葉」という言葉を信じて、ポジティブに頑張りたいと思います。

二つめは、知識です。なぜアーティストになるために知識が必要なのかというと、歌詞を作るときにはもちろん、話が面白い人は知識が豊富な人が多いと思うので、知識を多く

もっているということは、ビッグなアーティストになるためには必要だと思えます。知識をつけること、これは学ぶことと同じで、勉強と言えます。私は勉強が苦手です。しかし、テストのために勉強するという考え方を捨て、自分の夢を叶えるために勉強すると思うようになってから、勉強をするのが楽になりました。このように、モチベーションが上がらないことに対して、楽に向き合える方法も知識があれば見付けられると思えます。

三つめは技術です。歌や表現、パフォーマンスには技術が備わっていないと、自己満足で終わってしまいます。ビッグなアーティストになるためには、見ている人を惹きつける武器が大切だと思います。そのためには、気持ちだけでなく技術もあって初めて、人に応援される人になれるのです。

最後に、なんのために誰のために歌うのかということですが、自分が褒めてもらうため、目立ちたいからという理由では、聴いてくれる人の心を動かすことはできません。私の中の歌とは、聴く前と聴いた後で相手の気持ちを变えるということです。それができる人がビッグなアーティストになっているのだと思えます。

私は、高校に入ったらインターネットに自分の歌を投稿して、自分を見つけてもらい、二十歳にさいたまスーパーアリーナや東京ドームに立ちます。三十歳にワンマンで全国ツアーをします。その時、自分一人かグループでやっているかは分からないけど、その時の自分を信じて、自分を応援してくれる人を笑顔にできるように頑張ります。

好きなことを仕事にできる人は四人に一人と聞きます。本

当はものすごく怖いです。もし、こんなに高々と宣言して叶えられなかったらと思うと汗が止まりません。でも、誰よりも自分のやってきたことに自信があります。誰がなんと言おうとその気持ちは変わりません。中学二年生の時、不登校を経験したこと、親に将来のことを話したこと、自分らしさを馬鹿にされたこと、今となっては、それを乗り越えたから今があると思えます。これから先、楽しいことだけでは生きていけないことも分かっています。それでも、自分の好きな音楽を、誰かの心を動かせる音楽を伝えられるように、前向きに楽しく、前に自分の歩幅で進んでいこうと思えます。未来の自分に「叶えたよ」と言われることを信じて待っています。

見えない仕事の大切さ

中野区立中野中学校 二年

藤田 晴

七月四日から七月六日の三日間、私は三年制の短期大学に職場体験に行った。

「大学」と聞いて真っ先にイメージする職業は何だろうか。教授や学長のような表立って仕事をする人をきつと想像するのではないだろうか。今回、私が体験した職業は大学の事務員と清掃員の二つである。この体験は私のものの見方を変えるきっかけとなった。

職場体験初日は学校の見学から始まった。まず、実際に校

内をまわり、各部署の役割説明をしてもらった。事務員と一括りに言っても三つの部署に分かれているということを知った。学校の設備やお金の管理をする総務課、授業やイベントの主催などをとり行う教務学生支援室、入試の運営をする入学相談室の三つだ。役割説明の後は各教室の案内をしてもらった。この大学はあまり大きな学校ではないが、学生がとてきれいに使っているため、汚れが少ないそうだ。実際、私も教室を見て本当にきれいだと思った。学校見学の後は学校のPRのためSNSの投稿をした。私は普段SNSを使わないため、何を書けばいいか分からない部分もあった。ただ、この大学のアカウントの投稿を参考にしながら完成させることができた。

二日目は清掃を行う方に校内の清掃について教えてもらった。具体的にいうとモップがけと廊下のダストクロスがけだ。最初、清掃員の方が見本をしてくれた時は、「あれ、自分にもできるんじゃないか」と思ったが実際そんなことはなく、モップの先が思っていない方向にいたり、細かい汚れはとれなかったりと、すごく難しいということが分かった。そんな清掃の現場で一番印象的だった言葉が「清掃が一番大切なのは、周りの人の安全」という言葉だ。例えば、モップの棒の部分が人に当たってしまわないようにする、人が通る道に道具を置かないなどだ。これを聞き、私はこういった信念を抱くことが本当に「安全な」仕事につながるのだと思った。

その後は学内のプリントのラミネートをした。この作業も本当に難しく根気のいるものだった。これを普段からやっていると思うとすごいなと思った。

三日目は学内のイベントの広告作成をした。広告作成はプレゼンテーションソフトで行う。学生の多く集まるイベントの広告であったため最初は少し不安だったが、やっていくうちに慣れて最後の方はとても楽しく作っていくことができた。この三日間の職場体験が充実したものとなった背景には仕事を教えてくれた体験先の人々の優しさがあると思う。もし、体験先の人々が優しく接してくれなかったらきっとこれほどまでに充実した職場体験にはなっていなかっただろう。

この職場体験で仕事を教わった事務員、清掃員という職業は決して目立って活躍する職業ではないと思う。ただ、この人たちが学校の大きな部分を支えてくれている事を今回知ることができた。私たちの普段の生活も、こうした方々に支えられているのだろう。そのため、普段の学校生活の廊下やイベントも見えない所で努力している人がいるということを感じずに過ごしていきたくらいと思った。

言葉

中野区立中野中学校 二年

山崎 彩花

職場体験一日目、店長さんに「ミスにしても大丈夫、でもあいさつだけはしっかりと。」と言われた。その頃はなぜか分からなかった。いずれ大切さを実感するとも思わなかった。

一日目は色々なことをやらせてくれた。中には辛く大変なこともあった。もう一人の生徒が「やりたくない。」と弱音を吐くと店長さんは「仕事はやりたくないことや楽しいことだけをするものではない、辛く大変なこともこなさなくては。」と言った。今ではそれは店長さんの名言だとも思っている。確かに任される仕事は大変なものもあったし、弱音も吐きたかったが、私は胸にその言葉をぐっと刻んだ。一日目はあいさつをしても返ってこなかった。意味なんてあるのかと思った一日目だった。

二日目、あいさつをすると軽く会釈をされただけだった。なのにあいさつをし続ける店長さんや店員さんに疑問を抱いていた。何回あいさつをしても返ってくることは無く、限界で店長さんに質問をした。深く長い言葉が返ってくるのだろうと思った。店長さんは考えている。ようやく口を開いた店長さんは「いずれ分かるよ。」とたった一言。たった一言だった。早く知りたい気持ちや、解決しなかったモヤモヤとする気持ちを抑え、仕事に戻った。二日目は楽しい仕事が少なく大変な仕事が多かったため、足が疲れた。営業中ほとんどずっと立っていたから。それと同時に私たちよりもずっと立ち続け笑顔で接客をし続ける店長さんや店員さんを尊敬した。そしてその姿、背中には誰よりもかっこよかった。それを見てしびれ、勇気ややる気が湧いた。だから二日目を耐えしのげたのだと思う。ただ一つ疑問を浮かばせながら。「明日が最後か、なんだかんだ楽しかったな。まだ終わらないで欲しかったな。」と思いつながら帰った二日目だった。

三日目、とうとう最後の日。店内に入りあいさつをする。

角度は決まって四十五度。最後の日、職場体験は楽しいもので働くことについて理解を深めるものと考えていた私が多分一生残るだろう経験をする日。毎日必ず始めにする掃除を何気なくして回っていた。最後の日もあいさつはしていた。でも返ってくることはない。一度でもいいから返事が欲しいよなと思いつながら入口の前の掃除をしていた。

すると、入口の扉が開き、一人のお年寄りが入店してきた。こんなにも近くであいさつをすることがなかった私はあわてた。でも口と体が勝手に動いていて気付けば「いらっしやいませ、御来店ありがとうございます。」と会釈は四十五度で言っていた。頭を上げるとお年寄りは「ありがとうございます。頑張ってください。頭を上げるとお年寄りは「ありがとうございます。頑張ってください。最後の返事だったのだ。嬉しくて嬉しくて涙があふれそうなのを隠そうとしていて「ありがとうございます、頑張ります。」と会釈は九十度で言っていた。だが涙の意味はもう一つあった。それはあいさつへの気持ちと職場体験への気持ち。あいさつは意味がないと思ったし、言われたからやるという意識だった。仕事をしている人に失礼だと思った。三日目であいさつを返してくれたことも当然嬉しかったし申し訳ないと思っは思ったからこれからもあいさつをしつかりとしようと思っただ。返ってこないのは少し悲しいけれど、やりがいの方が大きいと思う。短く深い三日間は終わりを告げた。

私はあいさつの大切さを知ったつもりで今までを過ごしていた。この職場体験で思ったことの中でも一番は、あいさつや店長さんの話を聞いて思ったこと。それは、言葉一つ一つの重み。人の感情はとても多彩で一言にだけでも左右される

もの。言葉の一つが重いなら悪口の重みはどれほどだろうという恐怖心も大きかった。それで亡くなってしまった人もいるけれど、私が今できることは感謝を伝え続けることだと思う。言葉を一つ一つ噛み締めながら迷わず進んでいける私になりたい。

身近にいる大切な存在

北区立稲付中学校 三年

古本彩心

自分ではない、誰かのために勝ちたいと思ったことはあるだろうか。私は運動会という一つの行事を通して、大切なことに気付くことができた。身近にいる人たちの存在をテーマとして、感じたこと、学んだことを述べていこうと思う。

中学三年生の五月。運動会練習が始まった。練習のときから、私のクラスは最下位ばかりで、勝つことを諦めていた。このときの私は、「幸せ＝勝利」という考えしかもっていないかった。

運動会当日、せめて一競技だけでも最下位以外をとることを目標に私たちのクラスは競技に挑んだ。しかし、競技はすべて最下位に終わった。なぜこんなにも団結力のあるクラスなのに、勝つことができないのか。このクラスで運動会優勝を勝ちとることができていたら、どれほど幸せだったのだろうか。そんなことを考えていると、目からは涙があふれてい

た。それでもクラスメイトは前向きに、笑顔で「頑張ろう」と声をかけ続けてくれた。

私には、あと一つ、選抜のリレーの競技が残っていた。目は赤く充血し、走る気力ややる気さえも全て失っていた私だったが、クラスメイトの存在が私を大きく変えてくれた。クラスメイトからかけられた言葉、それは、「中学校最後の運動会の、最後の競技、一位でゴールするところを見せてくれよ。」「頑張って」「私たちも、全力で応援する。」それらの言葉は、とても頼もしく、背中を押してくれるものだった。代表だけの競技ではなくクラス全員で挑んだ競技だった。そこで私は決心した。絶対にこのクラスのみならず、喜びを分かち合うために勝とう。はじめてそんな気持ちになった。誰かのために勝ちたいと思えたのは、身近なところで支え、応援し続けてくれた人たちのおかげであり、私が大きく成長できた結果でもあるということだ。

私は本気だった。クラスメイトの気持ちを背負い、バトンを受け取る。走っている間もクラスメイトの声援が、校庭に響き続けていた。バトンをアンカーに託した。私はゼッケンを脱ぐことも忘れて、必死に応援し続けた。結果は一位。クラスメイトの方を見ると、全員満面の笑みで、私たちにピースサインやガッツポーズを送ってくれた。そのとき私は、「今、私、とても幸せだ。」ただそう感じた。一位を取ったときの瞬間的な喜びよりも、遥かにあたたかい、みんなの笑顔。この経験は私を大きく成長させてくれた。

身近なところにいる、クラスメイトや友達の存在。それは、思っているよりも心強く、影響の大きいものだ。成長できる

きっかけを与えてくれるのもそうだ。運動会を通して、負け悔しい気持ちよりも、喜びを分かち合えて幸せという気持ちの方が大きく、よい思い出となった。そして、私の生きがいを見付けることができた。

私の生きがいは、周囲の人たちが笑顔を絶やさず、幸せに過ごせることだ。これからも身近な人たちが笑顔を絶やさないうよう、役に立つ行動をとり、サポートをしていきたいと思う。そして、みんなの笑顔が消えないことを、心から願いたい。

努力

北区立赤羽岩淵中学校 三年

井出 零

私の将来の夢は、諦めずに努力をし続けることができるようになることだ。私は物事をすぐに諦めてしまうことがよくある。「私なんて無理だ」と、考えてしまうからだ。私はこれまでに習い事はあまりしてこなかったが、唯一続ける事ができた習い事がピアノだ。四歳から十四歳まで続けることができた。習い始めた頃、沢山のお金を使ってピアノを買ってくれたのにもかかわらず、私は家でピアノの練習を全然していなかった。「練習しなさい」と言われても泣きながら「弾けないくせに口出さないで！」と反抗していた。

私は十年間習ってきたなかで、人に自分のピアノを聞いてもらうことが嫌で聞かせたことがあまりなかった。それは家

族にも同じで、いつも練習はヘッドホンをつけながらやっていたので年に一度の発表会で聞いてもらうことしかなかった。でも、発表会は毎回両親と祖父母総出で見に来てくれて、発表が終わったあと笑顔で「頑張ったね、上手だったよ」と褒めてくれる。母が、離れている叔母や祖父母に動画を送っていつも会えない親戚たちも私のピアノを聞いて喜んでくれる。私はそれが嬉しくてたまらなかった。正直、家族に聞いてもらうのも緊張するし、私はプレッシャーに弱いので発表会はあまり好きではなかった。だけど私は、年に一度私のピアノを聞いてみんなに笑顔になってもらうために頑張っていた。

中学に入学して部活動と塾で忙しくなり、一週間に一回通っていたピアノを二週間に一回にした。練習も全然できなくなってしまったので、私は中一の発表会で来年の発表会を最後にピアノをやめることを決めた。練習時間が減り、最後の発表会の前にやめようと思ったこともあった。その度に発表が終わった後の家族みんなの笑顔と言葉を思い出した。

「最後の発表会、頑張ってたね」

普段はあまり話さないし、反抗してしまうことばかりだけど、私にとって最後まで支えてくれるのは結局、家族だと実感した。そんな家族の思いも胸に迎えた発表会当日。

前日はあまり寝られなかった。いざ明日で十年間通っていたピアノをやめると思うと少し寂しくなってしまうからだ。先生にも「頑張ってたね」と言ってもらった。舞台袖で待っているとき私は泣いていた。緊張と寂しさで感情がごちゃごちゃになっていた。私は名前を呼ばれて舞台に出た。舞台上立つと祖父母の楽しそうな顔と両親の少し不安そうな顔が見

えた。

最後のピアノの発表会に弾いた曲は祖母が好きな曲にした。毎年、弾く曲は先生に決めてもらっていたのだが、最後は弾きたい曲を先生にお願いして弾かせてもらった。手が震えながら私は最後までミスなく弾ききった。本番でミスをしなかったのは今までで初めてで、とても嬉しかった。退場して舞台袖にいったとき、先生が泣きながら「頑張ったね」と言ってくれた。席に戻ったときは家族のみんなが喜んでくれた。

本当に諦めないで続けてきてよかったと思った。最後の発表会は私の発表で幕を閉じた。ピアノのせいで親と喧嘩したこともやめようと思ったこともこの十年間で数えられないくらいあったけど、その時の私は達成感で溢れていた。十年間も通わせてくれた両親に本当に感謝の気持ちでいっぱいだ。私にはこれから受験がある。私は今まで進路の話や将来の話に耳をふさいできた。けどもう現実を目を向けないといけない時期が来てしまった。でも、私は努力を続けることの達成感を知っている。

諦めずに努力を続けると、こんなにもいいことがあるとピアノに通ってわかった。努力を続けても実らないこともある。だけど、その努力は無駄にならないし、自分の力になる。そのことを胸に、いつか諦めずに「努力することは大切だ」と胸を張って言えるような大人に私はなりたい。

二〇三〇年を創る私たち

北区立赤羽岩淵中学校 三年

川 俣 光 紗

二〇三〇年まであと七年を切った今、私たちにできることは何だろうか。

二〇一五年に国連サミットでSDGsが採択された。テレビやインターネットでも多く取り上げられている内容であり、日本では約九割の人がSDGsを知っているという調査結果が出ている。しかし、実際に課題解決に向けて自ら行動している人はどれほどいるのだろうか。

以前、私は技術や社会の授業、総合的な学習の時間に、SDGsについて考える機会があった。その際に、近くにいた数名から、「結局、SDGsって何?」「なんとなくは分かるけれど、何すればいいの?」といった声が多く聞こえてきた。これは大きな課題であると、私は感じた。調べてみると、日本でSDGsについてしっかりと理解している人は三割程度にすぎないことが分かった。

次は身近なSDGsに関する問題について考えていこうと思う。海岸には多くのプラスチックごみがある。それが原因となつて、病気にかかってしまう生き物も少なくないのが現実だ。これはSDGsの課題の一つであるゴール14の「海の豊かさを守ろう」に当てはまるのだ。身近な存在である海が、大きな問題となつていると知り、驚いた。正直私は、日本の

海はどこも綺麗だと考えていたからだ。また、この海のごみの問題に伴ってゴール12の「つくる責任、つかう責任」も日本では深刻な課題となっていることが、調べてみて分かった。

この二つのゴールを達成するために、私は自分ができる取り組みを見つけてきた。それは、ペットボトルキャップ回収だ。私は「赤岩を世界に」というキャッチコピーをもとに、この活動を公約として生徒会長に立候補した。結果多くの人からの応援があり、当選することができた。そして任期終了まであと半年となった際に、実際に生徒会本部の活動の一環として、ペットボトルキャップ回収を行うことになった。また、多くの人にこの活動に関わってほしいという願いから、各クラス対抗のゲーム形式にし、どのクラスが一番多くのペットボトルキャップを回収できるかを競い合った。期間は一週間で、学校全体で集まったキャップの量は約三十kgであった。この量がどのくらいなのか具体例を挙げてみよう。まず三十kgというのはペットボトルキャップ約千五百個である。想像すると膨大な数だ。また、キャップ千五百個を燃やしたときに排出される二酸化炭素を約百六g削減できる。このことを知ると私たちが集めたキャップはごく僅かに過ぎないが、より多くの人が参加し長期に渡って継続することで、少しずつ海のプラスチックごみを減少させることができるだろう。ごみを減らし、海を守り、環境問題改善にもつながるこの活動は一体一石何鳥なのだろうか。実はこの活動による効果はこれだけではないのだ。この活動で集めたキャップは何処へいくのか。それは、食べるものが無く、生活に困っている子どもたちや赤ちゃんの元へ、ワクチンとなって届けら

れる。これは世界全体で問題となっているSDGsにおけるゴール2の「飢餓をゼロに」にも該当するだろう。

このようにして私は、より良い環境を作り出すために、日々自分にできることから取り組みようと、意識している。そもそも授業でSDGsを学んだり、調べていたりしなかったら私は、SDGs達成のために何も取り組みでいなかったらSDGsを達成するための取り組みは、例に挙げたペットボトルキャップ回収の他にも、数え切れないくらい存在する。そしてSDGsは、誰かがどうにかしてくれる、という他人事では済まない重要な課題であるのだ。改めて、「二〇三〇年まで七年を切った今、私たちにできることは何だろうか。」一人一人の力が今後の世界を築くと思う。自分はどうしてみようかな、身近にできる対策から始めてみよう。こう考える人が増えることを私は祈っている。

将来の夢

北区立赤羽淵中学校 三年

小林 未唯

私の将来の夢は理学療法士になることです。理学療法士は一人一人の患者さんの症状をよく聞き、どんな方法でリハビリをしていくかを考えなければいけません。私は痛みや怪我で苦しんでいる人を少しでも減らしたいと思い、理学療法士

という仕事を目指しています。

私は中学入学前に膝を怪我してしまいました。当時小学校六年生だった私は、ここまで大きな怪我になるとは思っていませんでした。怪我をしてしまっただけから毎週リハビリに通っています。私はバスケットボール部に所属していましたが、最初は膝が動かなかったり、バスケットボールをする上での医師からの制限があったりなど思うように活動ができませんでした。できないことが多く「サボリじゃないの」などと言われてしまうことも多々ありました。リハビリを続けていく中でいつ治るのだろう、怪我したくしてしているわけじゃないのに、なんで「サボリ」と言われたいいけないのだろうと不安になることも何度もありました。そんな中で理学療法士さんが一生懸命私と向き合ってくれて「じゃあこのトレーニングをして部活動でできることを増やそうか」など親身になって話を聞いてくれました。私が弱音を吐いてもいつも励ましてくれてそのおかげで今も諦めずにリハビリを続けられているのではないかと思えます。リハビリをしながら理学療法士さんといういろいろな会話をするのがものすごく楽しみです、私の心の支えになっています。理学療法士という仕事は、怪我を治すだけでなく、患者さんとのコミュニケーションがとても大切なのだと思えました。どの理学療法士さんにも私に一生懸命向き合ってくれて私も自分の怪我と向き合えないと始まらないと思えることができました。術



後からのリハビリでも膝の調子が悪く、怪我が再発してしまいました。大変だしやめたい、どうして私かと思うことも何度もありました。そんなときにも明るく優しく声をかけてくれた理学療法士さんには感謝しかありません。そのことが当たり前のようで当たり前ではないことだと気付くことができました。

私に通っている病院の理学療法士さんに仕事のやりがいはどんなことがありますかと聞いてみました。その理学療法士さんは「直接見て症状が良くなっていたりすることがわかったり、できなかったことができるようになったりする経過が見られたりすること、単純に治ってくれたら嬉しい」とおっしゃっていました。大変なこともあるけれど、とてもやりがいのある仕事なのだと思えました。怪我で苦しい思いをしたからこそ、その思いが活かせるのではないかなと思いました。

理学療法士さんは 患者さんの症状、担当医師、怪我と付き合いながらコミュニケーションが重要な職業だと思えます。それはどんな職業でも大切なことだと思います。私は仕事内容については体験したことや見ていて学んだことしかわかりませんが、それぞれの患者さんに同じ症状だからといって同じリハビリ方法とは限りません。どのように痛むのかなど一人ひとりに合わせることが大切で、症状に合わせていうのはとても難しいことだと思います。「いつも患者さんに寄り添い少しでも悩みや不安を軽くしてくれる」そんな先生が私の憧れで夢です。

ものづくりの豊かさ

北区立赤羽岩淵中学校 三年

松本 晏佳

「つくることとはなにか。」と、考えてみたことがあった。ふと、普段の生活に目を向けてみると、私たちの身の周りには誰かがすでに作り出したもので溢れていることに気付いた。今座っている椅子も向き合っているパソコンも、着ている服、飲んでいる清涼飲料水などの工業製品も、駅前の絵画や彫刻、工芸品、音楽などのアートも、誰かが工夫を凝らしてつくったものだ。

だが、なぜそのようなものはおつくられるのだろうか。いくつか例を挙げて考えてみる。例えば、電球が発明される前と後とではどうだろう。電球がまだなかった時代、夜の明かりとして蝋燭や油を燃料としていた。明るさは豆電球ほどだから夜間の活動は昼間ほど活発にはできなかった。それがやがて時代と共に、電球が発明され人々に普及すると、今までよりも強い明かりの下、夜間でも昼間と変わらないぐらい活発に活動できるようになった。さらに、電球は以前までの日の出で起き、日没で寝るという人々の基本的な生活を変えたものでもある。

また、電話機に視点を変えてみても、発明される前までは双方でコミュニケーションを取りたい場合、実際に会って会話をするか手紙でやり取りするしかなかった。それが、電話

機が発明されるようになってからは、離れたところにいる人とでもリアルタイムで会話をすることが可能になった。また、時代が移り変わるとともに、さらに改良を重ね固定式から携帯式へと進化した。これによりどの場所においても好きなときに相手と話せるようになった。その後も、メール機能やカメラ機能が追加されたり、SNSを通じて新たなコミュニケーションの形が展開されたりした。このように、発明によってものがつくられることにより、人々の生活や文化の豊かさが発展する契機となった。

では、アートでは人々の豊かさとはなにか関わりはあるのだろうか。絵画などのアートというものは多種多様な表現方法で作者各々の感性が現れる。また、それは形容し難いほど多面的で深遠なものだ。だからこそ、見た者の感性を刺激し、新たな視野を広げてくれる。絵画などのアートには、作者の様々なコンセプトや価値観が反映されており、鑑賞する際「この作品には何が描かれているのか」「作者はなぜこれを描こうと思ったのか」「自分はこの作品を見てどう思ったのか」などと脳をフル回転させて考えるため、想像力が磨かれる。

また、音楽においても心と身体に良い影響をもたらすことがある。好きな音楽を聞いて元気づけられたり、感情が揺さぶられたりした経験は誰もがすることだろう。音楽を形作る要素はとても複雑で、テンポ、リズム、メロディーといったものから、歌詞のメッセーj性に至るまで様々な要素が複雑に絡みあって構成されている。曲調や音の高さ、リズムや速度が変われば受ける印象も変わるし、それに伴って心身の反応も変化する。例えば、アップテンポの曲には気分を高揚さ

せる効果があり、逆にゆったりとしたテンポと落ち着いたり
リズムの曲には鎮静効果があるといわれている。このように、
アートがつくりだされることにより、人々の心に想像力や感
性といった豊かさをもたらしているのだ。

おそらく、古来より人々は豊かさを求めてものをつくりだ
してきたのだろう。身の周りにあるものの多くが各々の進化
を遂げていることがこれを証明している。

「つくる」ということは、誰かの「暮らしを豊かにしたい」
という思いが追求に追求を重ね、そこに個の発想や感性が折
り重なった末に形になったものだ。私は考える。きつと豊か
さという感情を感じ取ることができる人間だからこそ、もの
をつくりだせるのだと思う。豊かさは喜びなのだ。

働く意味

荒川区立南千住第二中学校 二年

荒井 識 月

私は以前、保育園へ職場体験に行きました。約三日間の職
場体験によって得た貴重な学びはいくつかあります。

一つめは働くということを身近に経験できたことです。一日
目は緊張と不安がいっぱいありました。けれど職員の方の優し
さや、子どもたちの笑顔によって少しずつほぐれていきました。
職場では実際に園児たちと遊んだり、「お昼寝」をしている間
に掃除を行ったりしました。このような経験を通して自分が保

育士として働いていることを実感しました。その中でも一番大
変だったことは、おもちゃ拭きです。そんな大変なことでも毎
日やっているのはすごいと思いました。それと同時に働くとは、
どんなに大変でも行うものだと思います。

二つめはチームワークやコミュニケーションの大切さを
改めて感じる事ができたことです。まずチームワークは
職員の方とのものです。仕事は一人ではできません。必ず
仲間との協力があることを知りました。これは仕事だけで
はなく今後の生活にも活かすことができます。次にコミュ
ニケーションです。幼児はまだ上手く言葉を発することが
できません。そのため表情や行動で感情を表します。私た
ちはそこから感情を読み取る必要があります。難しいこと
ですが、これも仕事の一環であり大事なことだと思います。
また表情も大事ですが、大人と話すときにはハキハキと話
すことが大事でした。ハキハキと話さないで会話をし
まうと誤解を生んでしまうこともあります。職場に限った
ことではありませんが、しっかりと自分の思いを言葉にし
て話すことも大事だと学びました。

三つめは仕事へのやりがいについてです。私は今まで仕事
は給料をもらうため、生活するただけに行っているものだ
と考えていました。ある日、親に仕事をしなくてもお金がも
らえるなら今の仕事は続けるのか聞きました。私だったらや
めるなど思いながら質問すると、返ってきた回答は私とは違
いました。仕事は嫌なこともあるけど楽しい、と言っていま
した。つまりお金のためだけに仕事をしているわけではない、
ということを言っていました。その時の私には親の言ってい

ることがわかりませんでした。しかし職場体験を通して私の仕事に対する考えは変わりました。私がおかをする園児が笑ってくれたり、喜んでくれたりすることがたくさんありました。そのときはとても嬉しかったです。お昼寝をしている間の仕事は大変でも、その後の園児が笑っている姿を見ると自然と疲れがなくなりました。これがやりがいだと思っています。やりがいがあるからこそ、多くの人が仕事を続けられていると思います。

最後に、働くことで人の役に立てる喜びを感じました。保育園は、共働きの家庭にとっても便利だと思っています。また保育園だけではなく世の中にある仕事は全て人の役に立っていると思います。自分が働く、仕事をする事で誰かが喜んでくれたり、笑顔になってくれたりするのは嬉しいことです。実際、私も園児の保護者の方と話して、ありがとうと言ってもらえたときはとても嬉しかったです。このことから働くことに対しての喜びを学びました。

職場体験を通して普段の生活では学ぶことのできない貴重な経験をすることができました。例えば、仕事の内容や職場の雰囲気は実際に体験してみないと分かりません。体験できたからこそ今後に生かせることがあると思います。私たちが働く未来はそう遠くはありません。今はやりたいことが決まっていなくても、方向性を考えるなどできることもあります。その中で今回の体験から学んだことを活用できれば、それは自分にとって大きな財産だと思っています。

今後は体験で学んだことを活かし、少しでも自分の将来の方向性が決められるようにしたいと思います。

新たな私への第一歩

足立区立江南中学校 二年

内池 明陽

これまで私は将来について特に考えたことはなく、ただ何となく、いつも通りの生活が続いていくように思っていました。ですから、授業で職場体験に行くとも聞いても、あまり興味をもつこともなく、何のために働くのかも分かっていませんでした。「うまくできるか分からないけど、迷惑をかけるなければ良いかな。」と思いながら、私は職場体験に取り組みました。

私の体験先は老人ホームでした。最初はどうすれば良いか分からず、迷惑をかけてしまうのではないかと、少し不安でした。そんな時、担当の方から「大きな声でハキハキとしゃべると、良い印象をもたれるよ。」とアドバイスをもらいました。そのおかげで、途中からは、「迷惑をかけずにできた。」と実感することができました。

老人ホームでの体験内容は、利用者の方の車椅子を押したり、お話ししたり、食事のお手伝いをしたりなど、利用者の方のサポートでした。仕事は大変でしたが、利用者の方から「ありがとう。」と言ってもらえて、自分の頑張りも認めてもらえたように感じて、とても嬉しく感じました。

私はこの職場体験を通じて、働くということを少しだけ意識するようになりました。働くということは大変ですが、自

分の頑張りが認められるという喜びもあると思いました。働くということとは、お金を稼ぐためだけのことではなく、自分の努力や存在価値を感じられる手段でもあるかもしれないなと思いました。また、利用者の方が、笑顔になってくださるのを見て嬉しく思い、この笑顔を見るために職員の方は頑張っているのかなと思いました。

私は他人との関わりがあまり得意ではありません。他人との距離のとり方がよく分からないし、相手の気持ちを勝手に想像し過ぎて、自分の思っていることを上手く言葉にできず、口ごもったり、場にそぐわないことを言ってしまうので、コミュニケーションというものにマイナスのイメージがあり、つい消極的になってしまふのです。しかし、職場体験で職員の方や利用者の方と接して、考え方に変化がありました。私は伝え方が上手くありません。空気を読むのが下手なため、他人から良く思われたいこともあります。他人に頼り過ぎたり、だらしないうところもあります。そのため、他人から認められる機会が少なかったもので、他人と接するのがあまり好きではありませんでした。それが、この経験を通じて、他人との関わりの中から、「他の人が明るい印象をもってくれた。」「私のことを認めてくれた。」というプラスの気持ちが生まれるということに気付きました。

自分の将来について、あまり具体的なイメージはまだ持てていません。しかし、働くということは他人と関わるということだと思います。その関わりの中で、利用者の方の笑顔や温かい言葉で自分が嬉しい気持ちになったり、頑張ろうという気持ちになったりするということを学びました。今の私には、他人

との関わりに対する課題が沢山あります。人の話を興味をもって聞くことや、他人の目を意識して身だしなみを整えること等、私には苦手なことばかりです。しかし将来、仕事に就いた時、周囲の人を笑顔にしたり、周囲の人から温かい言葉をもらえたりできると嬉しいです。少しずつ苦手を克服していけるように頑張っていきたいと思えます。まず、中学校での人と人とのコミュニケーションを取り、明るい印象をもってもらえるように努力することから始めていきます。新たな私への第一歩となることを信じて……。

私と食事

足立区立伊興中学校 二年

小林 桃々

私は、家庭科の学習をしてわかったことがある。それは、食事の役割、食習慣、栄養素の働きについてだ。

一つめに、食事の役割についてである。私は、母が作ってくれる食事が楽しみとなっている。なぜなら、母は、いつも私の好きなものや家族が好きなものを考えながら作ってくれるからである。中でも、私はオムライスや、うずらの卵入りハンバーグの日が、特に楽しみである。

また、夕飯を祖父母と一緒に食べることが多いので、それが家族のふれあいの場となっていることも役割のひとつである。今日あったできごとや、たわいもない話をしながら食事

をすることが、小さいころからの私の日常であり、核家族が多くなってきた現代において、とても幸せなことだと感じる。

節分に恵方巻、ひな祭りではちらし寿司など、行事にあった食べ物を食べるといった食文化を知ることでも大事な役割だ。正月には祖母が松前漬けやのっぺ、お雑煮などの郷土料理を作ってくれ、それを食べることで、一年を元気に過ごせるような気持ちになる。母や祖母が作ってくれる食事には、色々な役割があるということを知った。

二つめに、食習慣についてである。食習慣を学ぶと、私の毎日の生活は、お手本のような生活なのではないかと感じた。例えば、「適度な運動」という点では、泳ぐことが好きで、保育園の頃から中学生になった今もスイミングスクールに通っている。週に二回通い、毎回一五〇〇m以上泳ぎ、運動だけでなくストレス発散にもなっている。また、「十分な睡眠」という点では、小学生の頃は朝六時に起き、夜八時に寝る生活をしていた。中学生になった今は、朝六時に起き、夜十時には寝るようにしている。朝御飯を毎朝しっかり食べること、健康に良い食習慣ができていると思う。

三つめに、「栄養素の働き」という点についてである。五大栄養素の役割や主に含まれる食品群を学ぶことで、家族の健康について考える機会となった。私の父と弟は貧血気味なので、血液をつくるためには、鉄分が多く含まれる食品が必要である。そのため、レバーやホウレン草、シジミ、牡蠣等をこまめに意識的に摂っている。祖母は骨密度が低いので、カルシウムを摂ると良いということ、またその際にビタミン

Dと一緒に摂取すると、さらに効果があるということも知った。今後、私が家族のために食事を作る時には、栄養素についても考えながら献立を考えてみたい。

このように、家庭科の学習を通じて、食事の役割や食生活、栄養素の働きについて、自分で考え、見つめ直すきっかけになった。特に食事の役割について、小さいころから祖父母や叔母など、大人数でテーブルを囲むことが当たり前であり、その大事さに気付いていなかった。食事を通じて、会話が生まれ、みんなが元気に生活することができるのは、食事というものがあるからであり、食事を作ってくれる家族に感謝しなければならぬと思う。

「技術」と「発電」

江戸川区立松江第四中学校 三年

寺門寿菜

最近、地球に関する問題が多いように感じます。例えば、海洋汚染や大気汚染、地球温暖化、鉱物資源の減少など、様々な種類があります。その中でも私が特に注目したいのは、三つめに挙げた、「地球温暖化」です。私は、この課題を解決に向かわす力が現代の世界の「技術」にあると思います。私がそう思う理由と共に、地球温暖化とその取り組みについて紹介していきます。

初めに、「地球温暖化」とはどのようなことを指している

のでしょうか。私たちの生活にどのような影響があるのでしょうか。地球温暖化を一言で表すと「地球の温度が上昇し、自然を壊してしまう」となります。具体的な原因は、石油や石炭などの化石燃料を燃焼することで発生する二酸化炭素や、燃料用のガスとして使われるメタンといった「温室効果ガス」と呼ばれるものです。このガスが地球の周りにたまり、太陽からの熱が宇宙へ戻らない事によって地球に熱がこもり、温度が高くなってしまふのです。これが悪化すると、私たちの体感温度が上がるだけでなく、食べ物が少なくなったり、海の水が増え陸地が減ったり、伝染病が多くなったりする恐れがあります。

そこで、私はこの事態を一刻も早く収めるために、「技術」が必要だと考えたのです。私は学校の技術の授業で、「発電方法」について習いました。以前までは、発電が環境と関わっていたと知りもしなかったのですが、この学習をした日からとても興味が湧くようになりました。

発電には、たくさん種類があるのですが、それだけでなく、メリットとデメリットもあります。例として、よく聞く「火力発電」と「風力発電」を比べると、前者は、燃焼して電気を作るため二酸化炭素を多く排出するのに対し、後者では、風を利用するため排出しないという相違点があります。反対に後者は風量によって発電できる電気が変わるため、発電量が安定しませんが、前者はそのようなことがありません。このことから、多くの種類がある発電でも、それぞれの特徴があるため、使い分けなければならぬことが分かります。

しかし、最新の技術では振動や動きが起こる場所であれば、

あらゆる場所で発電することができるようになると期待されている方法があります。それは「振動発電」というもので、実際に人々が床の上を歩いた振動を電気に変える実験が成功しており、この検証で得た電気は、照明やエスカレーターの駆動にも利用されています。この応用が利くようになると私たちがよく乗る自転車や鉄道、橋などにも用いられる可能性があります。さらに、この発電方法は、先ほどの地球温暖化の原因となる二酸化炭素の発生もありませんし、人が多い場所や揺れが大きい場所であれば安定して発電することが出来ます。このようにこれからの発電方法が変化し、盛んになると、世界問題に影響を与えられる存在になるのではないかと私は予想します。

私は、技術の授業でラジオ製作をしました。それには、手回し発電機がついており、それを回すことによってライトがついたり、携帯電話の充電ができたりします。私はこれが災害時に役に立つと思ひ、完成した今でも時々手回し発電機をして電気をためています。手回し発電機も振動発電と同じように温室効果ガスを排出しません。それに加え、私たち中学生でも簡単に発電できるため、とても便利で良い方法だと気がつきました。

今、私たちの世界には見て見ぬふりはできない課題がたくさんあります。ですが、それらを解決させる方法も多くあります。今回取り上げた、地球温暖化と発電はそのごく一部です。私たちは、抱えている今の世界的状況を理解し、改善していく必要があります。そしてこの世界を支えてくれているのが「技術」であるのだと私は信じています。

未来の自分へ

調布市立第八中学校 二年

加藤 大知

私は、子供たちと触れ合える仕事をしてみたかった。そこで私は夏休みに、母に紹介された民間学童でボランティア活動をした。

その学童では、両親が働いている小学校一年生から四年生くらいまでの子供を放課後や夏休み期間に預かっている。

私はその日、午後の時間からボランティアとして仕事に入ることになった。初めてその学童を訪れると、教室長の先生や他の先生が快く迎えてくれた。自己紹介の後、この学童の一日の流れについて教えてもらった。時間割があつて、それに従つて子供たちが活動する。例えば、イベント体験の時間、勉強する時間や専門の先生から学べる習い事の時間、自由時間がある。

最初に私は、子供たちの遊び相手になった。私は緊張していた。同じように、子供たちも緊張していたのだろう。彼らは私になかなか打ち解けてくれなかった。そこで、一緒に何かゲームをしよう、と誘ってみた。小学二年生を相手にボードゲームやブロックなどで遊んだ。この学童では一人っ子が多いようだ。そのせいか年上の私と遊んで喜んでくれた様子だった。彼らにとつては、兄ができたような感じだったのかもしれない。一時間くらい経つと教室長の先生の声かけで学

習時間となった。今度は私が低学年の女の子二人の勉強を手伝うことになった。二人は問題集を使って国語と算数の勉強をしていた。私は彼女たちに分からない問題を教えたり、丸付けをしたりした。しかし、これがなかなか大変だった。私をからかってなかなか勉強してくれないからだ。注意しても二人はお互い話すばかりだ。それでも私はなんとか一時間以内に二人に課題を解き終えさせることができた。学習時間が終わると、また自由時間になった。この施設には小さな体育館がある。今度はそこで、鬼ごっこやフライング・ディスクなどをしてへとへとになるまで遊んだ。子供たちに振り回されて正直疲れたが楽しい時間だった。

今回初めて仕事をする立場を経験して「好き、楽しい」という気持ちがある中で感じられたのは意外な発見だった。三時間ほどのボランティア活動が終わる頃、教室長の先生に学童の仕事についてインタビューをすることができた。

まず、この仕事の大変なところはどんなことかと聞いてみた。すると先生は、たくさんの子供を平等に見てあげることや、皆が安心安全に過ごせるように見守ることだと言っていた。また、仕事のやりがいについて聞いてみると、「ここには小さい子供たちが多くいるから少し日が経ただけでも、子供が成長をしているのを感じる。」また、「一週間の間にも成長を感じるときがある。」と言っていて、そんな変化を敏感に感じることができると言っていて、と驚いた。最後に、なぜ民間学童の先生になったのかと聞いてみた。先生は、元々教育関係の仕事をしていたそうだ。「学力をのばすことだけが教育か」というと、そうではないと思う。ここでは、違う学

校や学年の子供たちが集まって交流する。様々な学びの体験や習い事を通して育っていく子供たちを手助けする。そんな仕事にやりがいを感じている。」私は先生の言葉を忘れないようにメモした。

教室長の先生は子供たちから親しまれていて、信頼されている。周りにいる子供たちは笑顔で居心地良さそうだ。ふと私は、小学校低学年の時の担任の先生を思い出した。その先生は今でも私にとって大切な存在だ。なぜなら、みんなのことをとても大事に考えてくれたからだ。心を開いて、どんな子にも平等に接してくれた私の理想の先生としてずっと心に残っている。

そして私は決めた。大人になったときに「好き、楽しい」という気持ちで大事にして職業を選びたい。それがあれば、たとえ仕事がいかに通りにいかず、大変な時があつたとしても乗り越えられると思うからだ。

父から学んだこと

調布市立第八中学校 一年

小林 柚葉

お金をもらえたら嬉しい。お金を稼げば幸せを得られる。だから、人は働くのだろうか。いや、それだけではない。仕事のやりがいには他にもあるはずだ。本当の働くことの喜びとは、一体何なのだろう。

私の父は美容師だ。父が新しい美容室を開いて間もないとき、私は手伝いのため、よく父の美容室を訪れていた。少し緊張しながらも、自分に与えられた仕事を一生懸命にこなす。簡単で地味な作業ばかりだったが、自分

分が役に立っているような気がして楽しかった。自分の仕事に夢中になっていて最初は気付かなかったが、徐々に「父のすごさ」に気付いていった。それは、父はすごくコミュニケーション能力に長けているということ。それまで見たことがなかった父の仕事姿。慣れた手付きではさみを動かしながら、お客様が楽しめるような話を当たり前のようになっている。これを見た時、自分には絶対にできないと思った。ふと、お客様の方に目を向けると、とても笑顔で話しているのが楽しそうだったし、父のことを信頼しているようだった。

私はこの時、初めて働く現場を見た。初めて働くことを体で感じた。そして、初めて働くことの喜びとは何かを知った。私が思った「働くことの喜び」は、大きく分けて二つある。一つめは、「役に立っている・必要にされていると感じたこと」だ。これは、自分自身が手伝いをしているとき、お客様の役に立っていると感じたり、自分が父から必要とされていると感じたりして、それが原動力になったからだ。二つめは、「信頼関係を得ること」だ。これは父の仕事姿を間近で見て知ったこと。信頼関係を得ると、仕事をする側の安心や働きやすい環境作りに繋がり、働くことがより楽しいと感じられるか



らだ。

父はいつも私にこう言う。

「学校では学力を見られるけれど、大人になったら人間性やコミュニケーション能力の方が必要なんだよ。」

と。父がその例みたいなものだ。父は学生の時、学力がとても高かったというわけではなかったそうだ。でも、コミュニケーション能力や人との接し方は人一倍上手い。だから、仕事はすごく出来る人なのだと、あの時見て感じた。

これを踏まえて、私が思った本当の働くことの喜びとは、「良い人間関係・信頼関係」を作ること。これは、お金で手に入れることはできない。今までに培ってきたコミュニケーション能力や人との接し方を発揮して、初めて手に入られるもの。だからこそ、信頼されていると感じた時はやりがい、喜びを感じられるのではないか。でも、それよりも前に働くことを心から楽しんでいくのも重要だ。私の父は、真剣だけれど仕事をしているのが楽しそうだった。自分が楽しくないと仕事するのが苦になってしまったり、周りからも暗いように見られて信頼関係も築けなくなってしまう。だから、仕事を選ぶ段階から自分が楽しんで働けるかを想像し、仕事に就いた後は信頼し合える関係を作っていけるようにすることが大切だ。

私にはまだ、将来の夢が見つかっていないけれど、これからの中学校生活の中で人との接し方やコミュニケーション能力を養っていき、どんな職業に就いても楽しく充実したものになるようにしたい。そして何よりも、良い人間関係・信頼関係を築き、父のように働くことの喜びを心から感じたい。

ものづくりの基本

町田市立真光寺中学校 三年

堀江真広

私は家庭科の授業で学んだ食に関する知識がこの先私の人生において重要なものになると思う。

私は中学二年生のときの栄養素についての授業で料理に興味をもつようになった。特にそのときの先生の話で印象に残っているのはカルシウムの話だ。私は当時、カルシウムを最も多く含んでいるのは牛乳でその他にも魚の骨などにしかカルシウムは含まれていないと思っていた。だが、その授業で先生はほうれん草などの野菜にもカルシウムが多く含まれているものがあるという話をした。今考えてみると当然の内容だったと思うが当時の私からしたら衝撃的だった。そしてその授業を受けた日の夜、私はほうれん草を買ってきて簡単なおひたしを作った。美味しかった。その日の授業を意識していたせいか、本来なら感じるはずのないカルシウムの味を感じ、体に染みわたっているかを確認しながら食事をした。その日以降、私の食事に対する意識は大幅に変わった。まず、朝は必ず一日一杯牛乳を飲むようにし、夜はタンパク質が豊富な卵や肉を多めに摂るようにした。成長期ということもあり、この食生活は今も続いている。実際この行動にどれ程の効果があったかはわからないが、私の将来にとって大きな意味があったことは確かだ。この行動を機に食品一つ一つの栄

養バランスを意識しながら食事をするのがとても楽しいと感じるようになった。また、純粹に料理をすることが楽しいと思うようになった。肉や魚の調理以外にも休日にはお菓子づくりに取り組むようになった。レシピ本やSNSなどに載せられているお菓子を何度も試行錯誤しながら作っていくことには感じたことのない新たな楽しさがあった。だんだん慣れてきたら独自のアレンジを加えてみたり、何種類かのレシピを組み合わせて一つの大きな料理を作ったりするのもとても楽しかった。

私がこの体験で何度も感じていた楽しさは、ものづくりの楽しさだったと今でははっきりとわかる。自分の手で自分のために料理を作って自分でそれを食べる。一人で材料から完成まで頑張つてつくりあげていく。この楽しさは料理以外にも通ずると思う。例えば勉強だったら自分で一生懸命努力して今まで解けなかった問題が自分の力で解けると、とても嬉しくなる。スポーツでも何度も練習して新しい技を身に付け、それを使って試合で活躍できたときは他の何物にも代えがたい喜びを得ることができる。このように、自分で何かに向けて努力し、その成果を自分で感じることでできたときに人は最大限の喜びを感じるのだと思う。

私は将来、一人暮らしをしたいと考えている。そのためにも料理は必要不可欠だ。自分で食べたものがそのまま自分の体を作ったり、元気に生活するためのエネルギーになったりする。そのため、栄養バランスをおろそかにするわけにはいかない。十分な栄養を摂っていかないといけない。しかし、だからといって料理を楽しむことを忘れてしまっただけ駄目

だ。料理の楽しさは私たちを幸せにしてくれる。私はこれからも、ものづくりの楽しさを日々味わいながら元気に生活していきたいと思う。

すべての仕事にやりがいがある

東京都立大泉高等学校附属中学校 二年

島田 純

「すべての仕事にやりがいがある。」このことを私は今回の職場体験で学んだ。

職場体験ではスーパーマーケットで働いた。職場体験をするまでは、スーパーマーケットの仕事は品出しやレジ打ちなど普段買い物に行ったときに店員さんが簡単にこなしていることばかりで、私もすぐにできるのではないかと思っていた。そのため、正直やりがいは少ないのではないかと思っていた。しかし私の考えは甘く、実際に働いてみると想像以上に大変で、仕事をこなせたときにはとてもやりがいを感じた。

私はず、スーパーマーケットで働いて大変だと思った仕事は品出しだ。一見すると棚に商品を出すだけで簡単そうに見えるがそうではなかった。そもそもスーパーマーケットは広く、商品の数がとても多いので、どこにある商品なのかを探すのに苦労した。商品を並べる棚を探した後、食品であれば賞味期限を見て並べるため、一度すべての商品の期限を確認する必要があった。また、店内にはお客さんもいるので

お客さんの邪魔にならないよう注意しながら並べなければならず、周りにも気を付ける必要があった。大変なことが多かった品出のだが、商品をきれいにすべて並べ終えたときには、お客さんに来てよかったと思ってもらえる仕事を一つこなしただと思えて、とても達成感があった。

次に任された仕事は試食コーナーだった。この仕事では、ただお客さんに試食を提供するだけでなく店内放送も行った。店内放送では広い店内に自分の声が放送されると思うだけで緊張した。それに加え、他の部門での放送と被らないようにしたり、大きめの声で話さないとマイクが声を拾いにくかったりと、気を付けることが多く大変だった。また、私が仕事を任された時間がスーパーマーケットに来る人が少ない時間帯だったため、試食に来てくれる人が少なく不安もあった。しかし、放送に慣れていくうちにだんだんとお客さんが来てくれた。商品をおいしいと言って買ってくれたり、お客さんに「頑張ってるね」と言われたりしたときには嬉しくなり、それまでの大変さや不安さが一気に吹き飛んだ。店員さんもお客さんが試食をして買ってくれたときにはやりがいを感じると教えてくれ、私もそのやりがいを感じることができたと少し誇らしかった。

最後に任された仕事はレジ打ちだった。私が今回の職場体験で最もやりがいを感じた仕事だ。理由はとにかく注意すべきことが多かったからだ。例えば、魚や果物など潰れたら困るものは一旦よけておくことや、卵は割れていないか確認すること、重いものはかごの下の方に置くことなどがあった。その他技術的なことだけでなく、まずはお客さんに「いらっしゃいませ」と元気に挨拶をしたり、ポイントカードを持っているか聞いたりと、接客面でも注意するべきことが多く大変だった。そのため、実際にお客さんを相手にレジ打ちをしたときには今までにないほど緊張したが、お客さんに「ありがとう」と言ってもらえたときには挑戦してよかったと思え、とてもやりがいを感じた。

今回の職場体験では、品出しや試食の提供、店内放送やレジ打ちなどたくさんのお仕事を体験した。その中で私は、大変さ、楽しさ、不安と、感じるが多かったがやはり一番感じたのは「やりがい」だった。初めは、私にだっすぐでできるだろうと軽く見ていたが、実際に仕事をしてみると難しいことも多く成し遂げたときには大きなやりがいを感じた。それゆえ私は職場体験を通して、「すべての仕事にやりがいがある」ということを学んだ。だから将来、仕事に就いた際にはどんな仕事にもやりがいを持って精一杯働くことができたいと思う。



高等学校の部

専修学校の部



中扉デザイン

私たち10代の若者は、社会や職業についてまだ知らないことがたくさんあります。これから様々な職業があるということ、働くことの意義について学んでいきたいという気持ちを、胸をふくらませカメラをにぎりしめる少年で表現しました。

江戸川区立二之江中学校

1年 前原 椎花

高等学校の部 最優秀賞

成人看護実習で学び得たこと

愛国高等学校 三年

浪打 優

「いい看護師さんになってね。ありがとう。」

これは実習最終日の挨拶の際に、受け持ち患者様が涙を流しながらも笑顔でおっしゃってくださいました言葉です。

この方は四十歳代の女性の方で、小脳出血で緊急入院をされ、手術ではなく止血剤での保存療法を行っている方でした。家庭では主婦の役割を果たしながら、さらにお仕事も持っていらつしやるのですが、入院から既に一か月ほどが経過していたその当時は、休職中とのことでした。初めてお会いした際にご挨拶をすると、笑顔で温かく受け入れてくださり、とても明るく活気のある方という印象を受けました。三週間という短い期間ではありますが、患者様としつかりとコミュニケーションを取り、良好な関係を築こうと改めて心に命じ、実習に臨みました。

日々のコミュニケーションを通して、患者様の思いや治療に対する考えが伝わってくるように感じ、常に治療に前向きに取り組む患者様の姿に、私も嬉しくなりました。しかし、ある時私が「退院後は何がしたいですか?」と伺うと、「もう仕事は辞めようと思って。」という返答がありました。い

つも前向きでポジティブな患者様からの予想外の返答に、私はどう反応したらよいのか分かりませんでした。そこで、その日のカンファレンスで議題に挙げ、グループメンバーや指導者さんと話し合いました。その際に指導者さんから「それって本心なのかな?」と言われました。確かに、患者様は仕事の話をする際は生き生きとして饒舌になり、約二十年もの間続けてきたその仕事が本当にお好きな様子でした。「なぜ本当のことを伝えてくれないのだろう。信頼関係が築けていなかったのかな。」と私は感じました。しかし、指導者さんは、「そうやって伝えてくれたのは、信頼関係の中でのありのままなんじゃないかな。」と助言を下さいました。それを聞いて私は、患者様のありのままを受けとめることで、患者様の心に寄り添うことが出来るのだと気付きました。

家庭復帰に向けての作業療法として料理訓練を行っていた際、ジャガイモの皮をむいていた患者様が「この震えはもう治らないって先生に言われちゃったの。仕方がないわね。」と仰いました。その言葉を聞き、私は胸が痛くなりました。しかし、この時指導者さんの言葉を思い出しました。患者様は「仕方がない」と仰いましたが、それは本心ではない、自分に言い聞かせているに違いないと思っただけです。治療に前向きで一生懸命な患者様だからこそ、出来ないことや残った障害を受け入れるのは本当に辛いことだからです。しかし、その感情もまた、患者様のありのままなのだと思います。

障害の受容とは、「諦めでも居直りでもなく障害に対する価値観(感)の転換であり、障害があることが自己の全体としての人間的価値を低下させるものではないことの認識と体

得を通じて、恥の意識や劣等感を克服し、積極的な生活態度へと転ずることである」（上田敏著『障害の受容』）と定義されているように、その価値観（感）が変わる時、本当の意味で「仕方がない」と患者様が思える時が来るまで、メンタルの面からもしっかりと患者様を支援していくことが必要であると痛感しました。

今回の実習では、身体的な残存した障害、心理的な回復・復帰への不安、社会的な仕事についての三つの側面から患者様を見出し全人的に捉えることの大切さを学びました。患者様が仰った「いい看護師」とは、「患者様のありのままの心と身体により添う看護師」だと私は考えます。一人一人の個性を考え、共感し、受けとめることの出来る看護師を目指して、これからも励んでいきたいと思えます。

高等学校の部 優秀賞

現場で考え学びに向きあう

東京都立農産高等学校 三年

小林 漣

「農業」は「脳業」である。その方は私に教えてくれました。作物を育てることに興味があった私は、農業高校に進学し、二年生の夏に、農作業の手伝いをしに行きました。そこは神

奈川県の南足柄市で米や野菜、果樹などを生産している農家でした。八月と十月、十一月の三度にわたりそこを訪れ、そのたびに新たな学びや発見があり、私は農業に関する学びとの向き合い方について考えました。

八月に初めてその農家での農作業を体験した私は、学校の授業では知ることのなかった農業の過酷さを知り、現場を知ることの重要性を実感しました。

朝はヤギの世話にはじまり、収穫物の箱詰めや田んぼでの追肥、イチジクの樹の管理といった作業を暗くなるまで行い、家に帰ると翌日に備えて早々に寝床につきます。学校の実習では長くても四時間程度の作業しかないので、一日中続く作業は想像を絶する大変さでした。また、作業の中でも、強い日差しと肩に食い込むかごの重さに苦しんだ田んぼの追肥は特に印象に残っています。教科書では一言、「追肥」と書かれた作業は、私にとつてとても一言で言い表せるものではありませんでした。

この時の経験から私は現場を知ることの大切さを痛感しました。学校の専門科目では農業の広い範囲について、理論に基づいた知識や技術の基礎を学ぶことができます。しかし、それらが実際の農作業のほんの一部であると理解することが大切だと思いました。机に向かって学ぶと同時に、現場を五感で感じ、学ぶことこそ必要だと感じました。

私はさらに農業の現場を知りたいと思い、十月に再び、南足柄市に足を運びました。イネの収穫期であったこの時の体験から、私は農業において大切にしたい信念、そして農業の新たな楽しさを知りました。

イネは機械で収穫しますが、株間の雑草が茂っていると機械が詰まるため、まずその雑草を取る必要があります。草取りは機械の入る三列分を一人一列ずつに分担して行います。私も任された列の雑草を取っていました。しかし、作業に夢中になるあまり、担当外の列にも手を出してしまつたため、私の列に遅れが生じ、三列ごとに草取りと収穫を繰り返していた全体の作業にも遅れを発生させていました。初日の作業が終わると農家の方は私を呼び止め、そのことを説明し、私の作業の仕方が非効率的であると指摘しました。そして農作業では常に頭を使い、効率的に作業を行うことが大切であると教えてくれました。また、頭を使うためには、学業が不可欠であり、農業生産だけではなく、生物や病害虫、環境、栄養、経済、経営など、様々な分野の複合的な知識が効率化の助けとなると説明されました。そして最後に「農業」は常に頭を使い、考える「脳業」であると言いました。その言葉は私の心に深く刻まれました。

翌日の作業で草取りと収穫が格段に短い時間で終わり、他の人と息を合わせて作業を行う楽しさ、そして達成感に嬉しさがこみ上げました。

この経験は、私の農業を学習する姿勢に大きく影響し、実習の際は自分で考え行動することが増えました。これまでも単純な作業などを黙々と行うことは好きでしたが、考えながら行うことで、普段の実習はより楽しく、充実しました。そして農業は私にとってより魅力的なものになりました。

現在私は大学に進学し、農学を学びたいと思っています。私は自分が好きな作物の生産について学問として深めつつ、

現場にこだわり、目の前にある課題について農家の方々と解決を目指す研究に関わりたいです。

将来は常に現場を意識し、思考を続けることを忘れず、「脳業」を実現できる農業人になりたいと考えています。

生き物を守るために

東京都立農業高等学校 二年

大里 優羽

生物がどれほどのスピードで絶滅に瀕しているか知っていますか。二百年から三百年前は四年に一種、百年前は一年に一種、今では一年間に四万種以上の生物が絶滅していると言われています。そして、この絶滅していくスピードはさらに加速しています。私はこのような状況を変えていくために将来は保全活動が行える仕事に就きたいと考えています。そう考えるきっかけになったのは高校の部活動でした。

私の通っている高校には、ほかの学校に無い専門の部活動があり、私はその中の「神代農場部」に所属しています。神代農場部の活動では、湧水を使ってワサビを育て管理をしたり、カタクリの栽培、ヤマメやニジマスの養殖、農場に流れている湧水の水質調査、生物調査を行ったりと様々な活動を分担しています。この中で私は生物調査を担当しています。生物調査では主にホトケドジョウやヤゴ、夏にはホタルを見

ることができ、生き物が豊かに存在しているのがわかります。しかし、これらの生き物は絶滅危惧種に指定されています。ホトケドジョウは冷水を好みますが、湧水の水温は少しずつ上昇してきているのが現状です。そのため、何か対策を練らなければ、いずれ神代農場からも姿が見えなくなってしまうます。また、今年の夏は雨が非常に少なく水位も低くなっていました。そのため水温が上昇しやすく、住処が狭くなってしまいう状態に陥っています。さらに、外来種のアメリカザリガニも生物調査でよく見かけます。アメリカザリガニは水草やミジンコなどのプランクトン、水生昆虫を餌とし、繁殖力も高いため、生態系が崩れ水質が悪くなる原因につながります。そうなると、綺麗な水でしか育つことが難しいと言われるワサビやホトケドジョウ、ホタルなどの生物が育たず、絶滅につながります。

このような部活動での経験から今後どのような対策を行えば絶滅から遠ざけることができるのか考え始めました。また、水棲生物の他に、野山に暮らす動物達も同様に、外来種の侵入で在来種が大きく数を減らしてしまっています。こういった現状をどう改善していくのか興味を持つようになりました。このようなことから、環境保全について詳しく調べていくうちに、保全活動が行える職業を志すようになりました。

三年生に進級したら「課題研究」で外来種、在来種の生物調査を学校の農場や神代農場を活用して行いたいと思っています。そして具体的な種類、生息域を調査し、どこに外来種がいるのか、どのような影響が出ているのか調べていきたいです。また、将来は海外でも保全活動を行いたいと考えてい

るため、学習面では英語に力を入れたいと思っています。海外には日本にはいない生物が数多くおり、その生物たちの住処を守り、保護をしていくことで保全活動について新しいインスピレーションが湧いたり、生物についてより詳しくなれたり、勉強になることが多いからです。

高校卒業後はこれらの知識、経験を活かして環境保全や野生動物の保護活動について学べる学校に行きたいと思っています。そして自然保護官や野生生物調査員などの仕事に就き、日本だけでなく世界の様々な場所で活躍できるような人になり、生物を守っていききたいと考えています。

高等学校の部 佳作

わたしのしょうらいのゆめ

東京都立園芸高等学校 一年

ユスファイ ナジファ

わたしは、2022ねん2がつ、がいこくから、おっとといっしょに、にほんにきて、2023ねん4がつにはいりました。わたしのいまのせいふは、じょしが、ちゅうがつこういじょうのがっこうへいくことをみとめません。また、せいふはほんたいのひとをだんあつするので、わたしのおっとの

あには、わたしのくににいましたが、きよねんころされました。わたしのあねは、かんごしですが、そとにでてしごとをすることができず、しごとができません。わたしは、わたしのくににいるかぞくとインターネットで、れんらくしていますが、かぞくのせいかつがしんぱいです。にほんのこうこうは、わたしのくにとちがつて、じよしもだんしといっしょにべんきようし、のうじようのじっしゅうじゆぎようもあり、とてもおもしろいとおもいます。わたしはにほんにくるまえはじぶんのくにで、だいがくをそつぎようし、せんせいになつてがつこうがないちほうのじよしのせんせいになりたいとおもっていました。せいふがかわつて、できなくなりました。しかし、にほんでまたこうこうには入れたので、このままにほんのだいがくまですすみ、せんせいになりたいとおもっています。わたしはきよねんにほんでおんなのこをうみました。おんなのこは、いまほいくえんにあずけています。わたしはアルバイトもしています。わたしのかぞくは、じぶんのくににかえれないので、こんごにほんでせいかつしていきますが、まだ、にほんごがよくできないので、こうこうでもべんきようがよくわからず、こまることもよくあります。そこで、わたしもすこしにほんごのべんきようをしています。わたしのかぞくは、はやくにほんごができるようになり、わたしのこどもも、にほんのがっこうにはいって、にほんのせいかつになれていきたいとおもいます。にほんはあんぜんで、よるこどもがひとりですとをあるくことができます。また、すいどうやでんき、ガスがせいびされ、えいせいできてきです。がつこうやびよういんがせいびされ、けんこうしんだんもあり、に

ほんじんのじゆみようはながい。せんせいやいしやかんごしは、みんなしんせつです。やくしよのひともしんせつです。また、くやくしよのひともしんせつです。でんしゃやバスがあつて、こうつうがべんりです。わたしのじたくのきんじよには、みずがながれるいけで、おおくのこどもたちがあそんでおり、わたしのこどもあそんでいます。にほんのしりあいから、むかし、にほんでもせんそうがあり、くうしゅうがあつたというはなしをききましたが、いまはほんとうにへいわだとおもいます。また、こどものしゅっさんや、せいかつについて、おおくのふくしせいどがあり、たすかります。わたしは、にほんはぶつかはたかいです。いまくに、にほんじんはしあわせだとおもいます。いまのじよきようではむずかしいですが、もし、しょうらい、わたしのくにが、へいわになつて、わたしのかぞくがくにかえれば、わたしは、わたしのくにでせんせいになつて、にほんのこうこうや、せいかつのけいけんをやくだてて、ぼくのはつてんにこうけんすることが、わたしのゆめです。

農業の魅力

東京都立農芸高等学校 二年

林 咲 希

視界に広がる青い空、太陽の光を反射して輝く緑色の葉。そして鼻をくすぐる土の匂い。この光景は、私が通っている

高校の畑です。私はこの畑に、作物を育てる楽しさを教えてもらいました。

私が本校に入学したきっかけは、祖母の家庭菜園を手伝って農業に興味があったこと、もともと食えることが好きだったという漠然とした理由でした。しかし、実習を重ねていく内に私はだんだん育てることの大変さに気づいていきました。

一年生の実習で扱ったキュウリはどんどん成長していくので、少しでも収穫が遅れると見た目、食味ともに悪くなってしまいます。そのため、良いキュウリの収穫にはこまめに圃場に行ってキュウリの状態を確認するのが必要不可欠でした。ところが、うっかり観察に行くのを忘れてしまうことがあり、キュウリが大きくなりすぎていることが時々ありました。当時の私はキュウリをダメにしてしまっても「まあしょうがないか。」とっていました。

しかし、そんな考えはある時大きく変わりました。それは野菜の授業を担当する先生から話を聞いた時です。「君たちが学んでいる技術は、野菜がただ育てばいいというものではなく、その先にある販売・消費まで繋がるものでなくてはならない。」私はこの言葉を聞いてはっとしました。どんな風に育てるか、どうやったら作業がうまくいくかということばかりを考えて実習を行っていて、育てた先にいる消費者のことを全く考えられていませんでした。それまで私がやってきたことは農業ではなく、ただ植物を育てているだけの行為であつたことを痛感しました。それと同時に、作物に対して「まあしょうがない。」という軽い気持ちで接していたことを恥

ずかしく思いました。「私はもっと本当の『農業』を学びたい。」そう強く思い、行動に移しました。

それからは、畑に毎日足を運ぶようにしました。毎日野菜の様子を見てみると、前日にはなかった花が咲いていたり、少し元気がなくなっていたりするなど、今までは気づかなかつたちよつとした変化に気づけるようになりました。そうして毎日観察を続けていると、だんだんと野菜に愛着が湧いてきました。一日の間でもぐんぐん成長する健気な姿や、朝露に濡れて、きらりと光る果実の輝きがとても愛しく感じるようにもなりました。部活動で忙しく、畑に行く元気がない時もありましたが、そんな時も畑で一生懸命に頑張っている野菜を思うと、自然と畑に足が進みました。

また、もう一つ大きく印象に残っている出来事があります。それは二年生になって行った販売実習です。私たちのクラスが育てたジャガイモと園芸科学科で育てた野菜を生徒や先生方に向けて販売するというものです。それまで販売に関わつたことがなかったため、上手くできるか心配でした。しかし、そんな不安は杞憂に終わりました。予想より多くの人が販売所に来てくださり、廊下を埋める長い列ができました。私は会計係で、慣れないお釣りの計算やお金の受け渡しとで目の回る忙しさでした。そんな中、何より嬉しかったのは、お客さんからの「ありがとう」の言葉です。その言葉を聞くたび、胸が嬉しさでいっぱいになりました。販売実習が終わった後はかなり疲労を感じましたが、それ以上に達成感を強く感じています。普段は会うことのできない消費者と、販売を通じて繋がることのできた喜びは、言葉では言い表せないほど

のものでした。前に先生が言っていた「販売・消費まで繋がる」ことを、身をもって理解できたのではないかと思えます。私が今まで学んできたことは、農業という広い分野の中でもほんの僅かに過ぎません。まだ私の知らない農業の楽しい面も多くあると思います。これからももっと農業について勉強し、将来はその魅力をたくさんの人に伝えられるような活動をしたいです。

考えつづけて変えてく未来

東京都立農産高等学校 三年

今本 静穂

地球環境問題のために何か対策をしていますか。例えば、「3Rを心掛ける」、「買物の際には本当に必要なものなのか、考えてみる」、などたくさんの方策があると思いますが、理想と現実はその間に甘くありません。対策はたくさんあるのに、現状はよくなる傾向はないのではないのでしょうか。

それではもし、環境問題を放っておくと、何がまずいのでしょうか。例えば、地球温暖化を一つとって考えてみても、海面上昇、生態系の破壊、異常気象による農作物への被害、食料が減ることにより、飢餓や貧困も増えていきます。大気や水質、土壌の汚染、森林伐採、廃棄物など環境問題は、人の生活だけでなく、多くの生き物の生命を脅かしています。やはり、環境問題を解決するために、私たちにできることを

しなければならぬのではないかと私なりに考えました。

一つめは、今の生活を見直すことです。生活用品はオーガニックで環境に優しい素材の商品を選ぶ、SDGsに取り組むメーカーの製品を購入して応援する、レンタルの道具や家具を活用し、身軽な生活を楽しむなど、衣食住に関わることもたくさん工夫ができそうです。高校生の私たちも、エコバッグの持参や、もったいない買い物避けること、地元食材を活用したり、旬の食材を食べるなど今一度、自分の生活を見直したりしてみましょう。

二つめは、ボランティア活動に参加することです。しかし、ボランティア活動といっても、なにがあるかよく分からないし、ハードルが高いですよ。そこで私は、学校に案内が来た、「林業ボランティア」に参加してみました。ボランティアは、東京都西多摩部にある農林総合研究センター日の出庁舎という所で「枝打ち」と「伐倒」という作業を行いました。枝打ちとは、節という木の枝部分の付け根が少なく、幹の根元と上部の太さの差が小さい材を育成するために、生育に不要な枝を切り落とす作業です。伐倒は、木を切り倒す方向をコントロールして行う伐採方法です。伐倒は死亡事故が起きることもある、かなり危険な作業なので、指示をよく聞き、周りを見ながら慎重に行いました。体験してみても思ったことは、体力はもちろん必要ですが、手際の良さと、次のことを考えて作業することも大切だと感じました。また、山の中ということもあり、イノシシなどの動物対策の電気柵や、急な斜面など危険もたくさんありました。正直なお話をする、体力をかなり使ったので、疲労がひどく、次の日の筋肉

痛もすごく辛かったです。

私は、学校へきた案内が目に入り、たった一日林業のボランティアを体験しただけです。しかし、そのわずかな体験で、改めて森林の大切さを知ることができました。また、日本の林業が衰退しているという話は聞いたことがありましたが、実際に林業に触れてみて、ベテランの方々の技術を途絶えさせてはいけなさと強く思いました。日本は国土の約三分の二が森林です。改めて、温室効果ガスの削減や、生態系の保全に大きな役割を担っている森林を守ることの大切さを実感でき、とても良い体験をしたと思っています。私は将来、林業や自分の経験をもとに生徒の世界を広げられる教員など、農業に関わる仕事に就きたいと思っています。

まずは、ボランティア活動に参加してみること。参加して初めて知ること、感じるものがたくさんあると分かったので、残りの高校生活で、「環境問題」の解決に繋がる様々なボランティアに参加していきたいと思います。「環境問題」と聞くと、スケールが大きく取り組み辛いですが、地球に優しい生活を心掛け、一歩踏み出してボランティアをやってみる。そんな積み重ねが、地球の未来を変えていくと思います。



インターンシップを通して学んだこと

東京都立農業高等学校 二年

上田 愛花

私は夏季休業中にインターンシップに参加しました。就業先は都心部にあるホテルです。そこを選択した理由は、自営業のレストランでアルバイトをしていて、業態の違うホテルの調理現場はどうなっているのだろうと興味を持ったからです。五日間の就業体験を経て私は多くのことを学びました。その中に、私の職業観や、調理に対する意識が変わるような印象深い出来事が三つありました。

一つめは、「お客さんのために」ということです。それは大きなバットに小皿を敷き詰め、一皿ずつにトマトソースを入れる作業をしているときでした。職場の方が、「数はたくさんあるけど、お客さんに届くのはただ一つだから丁寧にね。」と、おっしゃいました。その言葉にハッと私は気づきました。仕込みのときはその他多くの一つでも、お客さんの目の前に現れるのはただ一つだけなのだど唐突に理解したのです。いつもの実習では自分の昼食を作っている気持ちでした。しかし、このとき初めて料理の向こう側にお客さんの姿が見えた気がしたのです。

二つめは、自分の仕事に責任を持ってやり遂げるということです。ホテルは町場のレストランと違ってパンを作る部署、スイーツを作る部署、肉を切り分けて各調理部門に届ける部

署等、セクシヨンごとに分かれていきます。どれひとつとして必要でないところはありません。私は多くの部署を見学させてもらいましたが、誰一人いい加減にやっている人はいませんでした。社会の一員として、責任を担って働く姿を目のあたりにしました。特に心に残っているのは、私に仕事を教えてくれた先輩です。その先輩は、いつも私に「焦らずやっていいよ」と優しく指導してくださいました。しかし、コース料理でスープを担当しているときは、とても真剣な眼差しで鍋を見つめ、背中から漂う気迫も別人のようでした。これが本物の職業人なのだと、私は肌で感じました。

三つめは、進路を選択する上での心構えです。私は大学へ進学するか、調理師として就職するか迷っています。そこで、実際に現場で働いている方々に、調理師の仕事についてどう思っているのかたくさん質問しました。やりがいが大きいのというメリットに対して、やはり過酷だという声が多かったです。事実インターシップ中の期間で、毎日のように、残業している人がいました。働いてみて、飲食業界は厳しい世界なのだと身に染みました。けれど、少し調理師という職業に対して消極的になっていた考えを覆す出来事がありました。ある先輩に調理師はつらいですか、と尋ねました。すると、「自分はずらくない。嫌だと言う人はやめればいいのではないか。」とおっしゃいました。つまりこの先輩は、つらいことがないわけではないが、自分の意志で調理師を続けているということなのです。仕事の大変さで選択するではありません。何のせいにもせず、確固たる自分の意志で進路を決めることが大切なのではないかと学びました。

五日間という短い期間で抱えきれないほど学び得たことがありました。高校卒業後の進路はどうするかまだ考え途中ですが、自分の将来を具体的にイメージする糸口となりました。今回の経験を自分のものとして、実りある豊かな毎日にしていきたいです。

喜び合うことに必要なこと

東京都立農業高等学校 二年

蟬 平 菜 月

今、あなたが使っている洋服、小物、アクセサリなどは、どのような理由で選びましたか。デザイン、使いやすさ、金額など、様々なことを考慮して購入していると思います。このようなことを考えるのに至ったのは、文化祭の小物販売での経験からです。

私の通う服飾科では、基本的な服飾知識や造形技術を習います。それらの学んだことを生かし、一年生では文化祭で、自分の作った小物を販売する小物販売を行いました。私は小さい頃から小物作りが好きで、家族や友人によく作っては、プレゼントしていました。自分の作ったものがデザインや機能性があまり良いものといえなくても、もらった相手は喜んでくれました。このことから、使う相手のことを深く考えずに、ただ作ることを目的にしまっていました。それは文化祭で販売するものと同じです。

私が文化祭に向けて作ったものは、紙ひもで作る帽子型の

アクセサリーと、エコバッグ、ワンタッチボタンのポーチでした。私がこの中のもので、一番自分で自信があったのは、ポーチでした。その次はエコバッグで、三つの中で一番自信がなかったのが、帽子型のアクセサリーでした。

ところが私の予想とは裏腹に、一番早く売り切れたのは帽子型のアクセサリーであり、一番自信のあったポーチは売れ残りが出てしまいました。なぜ売れ残ってしまったのか。それは試作品で作ったポーチを実際に使ってみるとすぐにわかりました。

今回作っていたポーチは作りやすさを重視し、比較的簡単に取りつけられるワンタッチボタンを使用していました。しかし私が使用していたボタンは、力を強く込めないとしつかりとめることができず、普段使いをするときに支障があることがわかりました。さらにマチをつけておらず、大きさも使いやすいものとはいえませんでした。価格も他の作っていた商品よりも高い方だったので、これらの理由も相まって売れ残りがでてしまっていたのです。

そのようにして考えたとき、他の商品も良いものといえたのでしょうか。エコバッグは、ビニール袋が有料化してすぐの頃よりも需要が落ちており、買おうとする方は少ないように感じました。また、友人が使ってみたときに、畳み方がわからないと言う人もいました。売り場には使い方や、大きさなどを具体的に記載しているものを用意していなかったのでも、購入するののためにめらいが出やすかったように感じました。帽子型のアクセサリーでは、欠陥こそはなかったものの、デザインに偏りがあるように感じました。このような反省点は

作る立場として考えられていませんでしたが、普段の商品を選ぶときには判断材料にしているものです。商品を選ぶ側の立場として何を求めて、購入後どんな問題点があるのか視点を変えて考える必要があると思いました。

このように、実際に作ったものを販売する経験を得られたことで、自分の制作を見つめ直す良い機会になりました。自分がこれから作るものはどのような用途で、どのようなことが求められているのかを考え、作る立場としてではなく、買う人の立場で制作することが、お客様に長く喜んで使ってもらうのに大切だと思いました。「お客様の立場で考える」というのは当たり前のことですが、この当たり前のことを何度も見直すことが、お客様とお互いに喜び合うために、何よりも必要なことなのです。

幸せを届ける職業に向かって

東京都立農業高等学校 二年

中原 萌音

私は将来、調理師になりたいと思っています。特に集団給食、大量調理をする調理師になりたいです。学校の授業で見学に行った小中学校の給食センターで沢山の子供たちの御飯を作っている大変さや食中毒などの衛生管理の素晴らしさを知りました。例えば、私が入れそうな回転釜に大量の食材を入れ、大きいスパテラで混ぜていて、力仕事だと思いました。

実際に大きいスパテラを持って、混ぜてみるととても重く、ほぼ毎日、この器具を使って、調理している職員の方は本当に大変だと思いました。しかし、それ以上に達成感があり、沢山の子供たちに「食の幸せ」を届けられる素晴らしい職業だと感じました。

一方で捨てきれないのが保育園の給食施設です。これから八月一日～五日の五日間、インターンシップに行くのですが、保育園の給食施設で良いのは、実際に子供たちが食べている様子を見られること、給食センターと比べて、子供たちとの距離が近いこと、これらが私の中で期待することです。給食センターは大量調理はできるけれど、実際に食べている子供たちの様子をなかなか見られず、声を聞くことが難しいです。一方で保育園の給食施設は給食センターと比べて、食べている子供たちの様子を見られ、声を聞くことができます。しかし、調理員や職員の人数は給食センターと比べて、少なくなるため、今、小中学校の方が保育園の方かとても迷っています。また、自分が作った料理で人を幸せにしたいのなら、レストランや飲食店でもいいのではないかと思っています。

そもそも私は最初から調理師になりたいとは思っていませんでした。元々は絵を描く関係の職業に就きたいと思っていました。小さい頃から絵を描くことが大好きで、暇さえあれば、ずっと絵を描いていました。そんな私が進路選択の二三の時に、絵を学べる科がある高校ばかり調べながら、私はふと思いました。「絵は好きだけれど、それを仕事にするとうなのか。」と。実は美術部の時、展覧会の作品を期限までに出さなくてはいけないとなった時に、絵を描くことを仕事

にすることが嫌だと思ってしまいました。私はこれにより、絵は趣味のうちに留めておこうと思いましたが、そうすると、私は何を学び、何を仕事にしたいのかわからなくなってしまう。悩んでいる時、母は社員食堂で働いていて、よく話を聞いていました。段々話を聞いていくうちに御飯を作った、沢山の人に幸せを届ける仕事は素晴らしい職業だと思いました。

私は食えることが大好きで、御飯を食べると幸せな気持ちになります。食は人間に不可欠なもので体を作るために必要なものです。私は食事を作り、沢山の人にエネルギーと栄養を届ける職業に就きたいとその時、思いました。食について学べる高校を調べているうちに食事を作り、届ける職業は調理師だと分かり、現在、通学している高校に入学しました。調理の技術だけでなく、食品衛生や栄養についても学べるので、日常生活に役に立つことが多く、調理師を目指して良かったと思いました。

最後に、現在、食について悩んでいる方は沢山います。実際に自分も悩んでいて、つらさや苦しみは理解できます。食について悩んでいる方を助けられる、また彼らに寄り添える調理師になりたいです。幸せを届ける職業に向かって、日々、勇往邁進で頑張ります。



養豚体験の価値を届けたい

東京都立瑞穂農芸高等学校 三年

下田 緩乃

三年生の夏、一年半担当してきた母豚を分娩後の体力低下と夏バテで死なせてしまった。これまでも、先生から家畜は利益を出すことが目的で飼われているから生産性の低い個体は淘汰されることを聞いてきた。しかし、私は担当の豚の死をきっかけに、産業動物である豚との向き合い方に答えが出せずにいた。そんな時、養豚場でのインターンシップに参加する機会をいただいた。

お世話になった千葉県養豚場では生産から加工、販売までを行う六次産業化に取り組み、地域の子供たちへの食育や学生のインターンシップの受け入れ、循環型農業への取り組みにも力を入れていた。

農場はとても大きく、空調設備や給餌、給水、糞尿処理などは全て機械化されシステムチックに作業を行っていた。そして、機械化できない部分は、人が丁寧に管理をしていた。しかし、それでも毎日十頭程度の豚が死んでしまっている現状を知り、社員さんの一人に日々何頭も命を落としていく豚に対してどんな思いで仕事をしているか聞いてみると、

「もし、豚が死んでしまっても悲しいとか可哀想とか思わず、死んでしまった豚のメッセージだと考えて次へ生かす事が大切。養豚農家は豚がいての商売だから常に命と向き合っ

ている。」この話を聞いた時、社員さんの豚に対する思いやプロ意識を知って、私も担当の豚の死をただ悲しむのではなく、原因を考えて次の豚が家畜として天寿を全うできるように日々豚を育てていきたいと思った。

それから、従業員さんが働く姿を改めて観察してみると常に豚のために毎日地道な努力を続けていることがわかった。そして、私も短い期間の中ではあったが、学校とは比べ物にならない規模の養豚場で働き、豚の繁殖から分娩、出荷までを経験したことで豚が無事に大きく育ったことの喜びや達成感を感じることができ、これが養豚業で働く原動力になるのだと実感した。

また、豚を育てることは命を育てる責任が伴い、手をかけて育てた豚が食品となって人々に届きお肉となり食される事で命が循環していることについて改めて考えることができた。そして、これらの気づきは養豚をやって得る事のできる豊かな体験だと感じた。

しかし、機械化が進む養豚場ではあるものの、人手不足は問題になっている。私がお世話になった肥育農場では、三人体制で五千頭の肥育豚を管理していたが、ある日、二人が休暇を取っていて一人で仕事をしていた。従業員の方はよくある事だと言っていた。

養豚場で働く人を増やすためにはもっと養豚のことについて知ってもらう機会を増やさなければいけないと私は考えた。特に、養豚業は同じ畜産業の酪農と比べ、観光牧場などで豚に触れる機会はほとんどないため養豚をイメージしにくい現状がある。そこで、私がこのインターンシップや学校で

学んでいることを色々な人に感じてもらえる機会を設ける事ができれば、養豚に興味を持つ人が増えるだろうと考えた。そこで、まずは私が学ぶ地域の人にイベントなどで豚の基本的な生態や豚の一生などについて伝えていきたい。そして、自分が育てた豚肉を食べてもらうことで実際に命をいただいていることを伝えていきたい。

農業との距離が大きくなってしまった現代、このような機会は今後、社会全体でも広めていく必要があると考える。そのため、私は高校卒業後、大学に進学して豚をはじめ、家畜との関わりが人に与える効果や社会全体で畜産業や食について考える活動について研究したいと考えている。さらにはその研究成果を生かし、養豚農家さんと地域の活性化が図れるような仕組みを作り、ビジネスとしても成立できる養豚体験事業を実現していきたい。養豚業に関する正しい理解を促したり、興味を持ってもらい、おいしい豚肉を育てたいと考える将来の養豚家を増やしていきたい。

私が目指す新しい酪農の形

東京都立瑞穂農芸高等学校 二年

吉田 穂乃里

高校に入学する前、私は酪農とは搾乳をし、その時間以外は牛を自由にしているというイメージを持っていました。しかし、日本の酪農はほとんどが鎖などでつながれたつなぎ飼育方式が

主流でした。この飼育方法では隣の牛との距離が近いためのびのびとできず、すぐ近くの牛と喧嘩が起こっていました。この状態が続いてしまうとストレスがたまり、乳量や乳質の低下も考えられます。そこで私はもっと牛が自由に過ごせる放牧を行うべきだと感じました。私の学校には小さな放牧場があり、時々放牧をします。すると出た瞬間から飛び跳ね、嬉しそうにしている姿を見かけます。私は牛が喜ぶ姿をもっと見たいと思い、放牧を取り入れていきたいと思うようになりました。

そこで、私は日本にあう放牧の形を考えるため「畜産ティーン育成プロジェクト」に参加し、オーストラリアに行き海外の酪農について学んできました。現地では私が普段管理を行っている日本の経営とは様々な違いがありました。まずオーストラリアには牛舎がなく、あるのは搾乳舎のみでした。搾乳の時間以外、牛は放牧され本来の姿で過ごし、ストレスがかからない環境でした。この環境から私は日本で実現可能な放牧の形を考えました。それは山を放牧地とすることです。日本の特徴として山が多く、平地が少ないことが挙げられます。その地形が影響し日本は放牧が難しいとされています。日本の山は整備されていない山も多くあり、そこを開拓し放牧地を作れば環境保全にもつながるし、牛にとってもいい環境作りができると思いました。

しかし、そんな放牧経営にも欠点があります。それは個体管理が徹底できないことです。広大な土地で異常を発見することは難しいため、オーストラリアの農家の方は毎日見回りをすることを大切にしていました。日本では牛に耳標を付ける決まりがあるためICTを活用すれば放牧をしても個体管理

をできると考えています。この日本にある高い技術とオーストラリアの放牧を組み合わせた良い形を作っていきたいです。

また、放牧をすることで牛は自由になります。土地の維持や乳量などの影響で牛乳の価格は高くなります。そのため消費者に放牧している農場の魅力やその商品の価値を伝える必要があります。日本の課題として農業を学ぶ機会や農業体験が少ないため、消費者が畜産現場を知らないことが挙げられます。この現状が続くと商品を高くしても買ってもらえないし、消費者は安い方を求めてしまいます。そこでオーストラリアの農家の方に「消費者に放牧経営の中でこだわりの持つて生産していることは知られていますか？」と質問しました。すると「あまり知られていない」と言っていました。そこでオーストラリアと日本は経営方法が違うだけで、同じような課題を持っていると気付きました。その対策としてオーストラリアでは中学校で八週間の農業の授業や農場でのVR搾乳体験を行いました。この活動を行うことで消費者が酪農を知るいい機会を作り、広める活動をしていると分かりました。そこで日本でも消費者に酪農業を知ってもらうため、学校での授業や農業体験を行っていくべきだと思います。そのため、オーストラリアで学んだことや日々の授業や実習で学んでいる畜産、酪農の魅力を伝え、日本にある課題を解決していきたいです。

このようにして放牧を取り入れ、消費者にアプローチを行い、私の夢を実現していきたいです。そのために酪農についてより勉強し学校での実習を通して他の課題についても考え、解決していき新しい酪農の形を作っていきたいです。

心をつなぐ老人ホームでの職場体験

東京都立瑞穂農芸高等学校 一年

陶 浩 太

私は八月三日に養護老人ホームへ職場体験に行き、その中で多くのことを学びました。

私の職場体験のきっかけは、祖母の影響から始まりました。祖母はリウマチを患っており、私もよく身の回りの手伝いをしていました。痛みと闘いながらもいつも優しい祖母を見て、いつまでも元気に長く生きていてほしいと思いい、できる限りのことをして祖母の支えになろうと努力してきました。母もまた、祖母の介護に深く関わってきました。母は介護職に従事しており、ヘルパーさんがいない日は祖母の世話をしており、私も手助けをすることがよくありました。そんな母の背中を見て私も同じように誰かの役に立つ仕事に興味を抱くようになりました。

職場体験当日、私は早起きをして体験場所に向かいました。これまで老人ホームへ行ったことがなかったので、私は新たな世界に踏み入れる興奮と緊張を感じていました。しかし一度足を踏み入れると、その場所にはとても温かな空気が広がっていました。朝、利用者の方々が集まって行う体操から始まりました。私も一緒に参加し、健康を保つための大切さを学びました。その後食事の準備や、食事をしてるときにどのようなものを食べているかなどを見させてもらいまし

た。午後は、利用者さんとお話をしたり、風船で遊んだりしました。多くの人と会話をする中で、それぞれの人生や、経験に触れることができ、新たな視点を得ることができました。中でも一番心に残っていることは百四歳の入居されている方の言葉でした。「人生は楽しいことや辛いことや悲しいことや嬉しいことなどいろいろなことがある。でも人とは比べてはいけない。あなたはあなたなのだから。人は十人十色でいろいろな人がいる。だからわからないことがあったら一回自分は黙って相手の話を聞き、飲み込んで自分のものとして学習していくことが大切。でも一番大切なのは自分が元気でいることだから、無理しないようにゆっくりでいいから徐々に徐々に慣れていって、健康を第一にあなたなりに頑張っつてね。私はあなたのことを応援しているわ。」という言葉にひどく感動しました。長い年月を生きている方だからこそその言葉の重みを感じました。また四人の方と風船バレーをしました。どの方もとても元気で、しっかりと自分のところに打ち返してくれて皆さんとても楽しそうに笑っていました。その笑顔こそが大変な介護のお仕事での一番のやりがいなのだろうと感じました。日々の生活の中でお手伝いやコミュニケーションを通じて、利用者の方々とこの絆が深まる姿に触れました。そして、スタッフの方々の尽力や思いやりにも感銘を受けました。

今回の職場体験は、私にとって大きな意味を持つ貴重な体験でした。そこで出会った利用者の方々やスタッフの皆さんから、人間関係や思いやりの大切さを学ぶことができました。年齢や背景の違いを超えて、利用者の方々と共に過ごす時間は、私の視野を広げ、他人に寄り添うことの重要性を改めて

教えてくれました。彼らの人生経験や、お話を聞く中で、人生の尊さや、価値を深く感じることができました。また、スタッフの方々の尽力と温かさに触れることで、介護や、支援の仕事に対する感謝の気持ちがより一層深まりました。この職場体験を通じて、人々との繋がりが思いやりの大切さを学び、社会に貢献する仕事に改めて興味がわきました。養護老人ホームでの素晴らしい経験をもとに私は将来、自分の力で誰かの笑顔を支える存在になりたいと強く思いました。

ニワトリと私

東京都立瑞穂農芸高等学校 一年

竹内 ひかり

私の夢は養鶏家になることです。きっかけは私が高校に入学して初めて畜産動物としてニワトリの飼育を学んだ分野が養鶏だったからです。はじめはニワトリの品種や飼育法すら知らなかった私でしたが、ニワトリのことを学ぶほど彼らが好きになりました。

とあるニワトリの授業にて、先生から、「ニワトリの卵黄の色はエサの色で決まり、味もエサによるものである。」と教わり、そこから私はさらにニワトリに興味を持ち、自らニワトリのことを調べるようになりました。

自分で調べて知ったことを友人に話すと、「おもしろいね。」

と共感してくれました。そこから調べた知識をもとにニワトリや卵のことについて考える四人グループができました。すでに実行したことは少ないですがおやつに代わりに雑草を与えてエサ代の削減を試みたり、ニワトリたちのストレスによるつつき合いを抑えるためにしめ縄をつくっておもちゃにしたりしました。

ところで、「アニマルウェルフェア」という言葉があります。アニマルウェルフェアは動物が動物らしく生きる権利と自由を主張したものです。現在、畜産業界ではこれがかかなり重要になってきています。しかしながら畜産動物はペットとして飼育しているわけではないので、収益を考えつつ動物たちへの配慮も考えなければなりません。ニワトリで例えると、平飼いという飼育方法は自由に行動できるためニワトリにとって快適な暮らしと言えます。対してケージ飼いという飼育方法は自由こそ制限されていますが、つくづくことによつて卵が割れてしまったり、ふんの掃除が大変だったりせず、生産性が高いため収益もその分多くなります。

卵の値段が高騰する中、私たちが次に考えたのは卵のブランド化についてです。「卵黄の色がエサの色で決まる」ということは、おもしろみのある黒い卵黄や、おいしそうに見える赤みのある卵黄をつくる方法を考えました。調べたところ、色素には水溶性と脂溶性という性質があり、水溶性はふんとなつて外に排出されてしまつて卵黄に色はつかないことが分かりました。しかし脂溶性の色素は水に溶けにくいいため卵黄の色が変わるそうです。

これらのように、私はニワトリのため、消費者のために考

えて実行できる卵の生産者である養鶏家になりたいです。ニワトリのひなの約半分がオスで、そのオスは卵を産めないため処分されてしまうことがほとんどです。そのオスを活用しようと、オスの鶏肉ソーセージを発明した人もいました。私も、オスのニワトリを活用し、鶏肉として商品化していきたいです。生まれてすぐ処分されることで自由を奪われないようにするニワトリへの配慮とオスの鶏から得られる鶏肉から生産性もあると考えられます。ニワトリも消費者も幸せにできるような生産者になつて、それをゴールにせず、さらに良い策を考え続けられるような人になりたいです。そのためにこれからも高校の勉強にはげみ、ここでしか味わえない体験を大切にしていきたいです。

私の将来

東京都立第三商業高等学校 三年

小木曾 南

進路選択が求められる今、将来どんな大人になりたいか考えた時に、「図書館司書」という職業が頭に浮かんだ。

図書館司書とは、公立図書館や教育機関等の図書館で、本の発注や選択、保管などを行う専門職のことだ。図書館司書になりたいと思った理由は二つある。

私は本を読むことが好きだ。しかし「時間のある時は必ず本」という程好きというわけではない。ただ、本には不思議

議な力があると思っっている。私自身がとても感情移入の激しい性格なので、本を読むたびその世界にのめり込んでしまい、気が病んでしまうことも度々あった。私はミステリーやファンタジーなど、幅広いジャンルに触れているが、一番読むのは恋愛小説だ。読む度に何回も胸が締め付けられる体験をし、恥ずかしながら、こういう恋をしてみたいと思ってしまう。先ほど、本には不思議な力があると述べたが、これは個人の感受性によるものであるのかもしれない。魔法使いが主軸の作品を読めば自分も魔法使いに、動物目線軸の物語なら自分も動物に、本を読めば自分が何者にもなれる。自分のことが嫌いな人も本を読めば「好きな自分に出会えるかもしれない。」と私は思っている。そんな作品一つで人の人生に多くの刺激を与えてくれる。言わば無限の可能性を秘めている本にどんな形でも携わる事ができる仕事に就きたい。これが、一つめの理由だ。

私の家の目の前には公立の図書館がある。閑静な住宅地の中に建っており、落ち着いた雰囲気地域の人からも愛されている。私も幼い頃から両親に連れられてよく利用していた。小学生になると外で遊ぶことが増え、行く頻度は減ったものの、中学に進学するとはほぼ毎日のように学校帰りにその足で図書館に向かい、多くの本を読んだ。その度に本を借りるカウスターに座っている女性の司書さん。その司書さんは、図書館内で私に会う度必ず挨拶と一言を添えてくれた。些細なことだが、毎回とても元気をもらっていた。それが私だけではなく、他の利用者さんに対しても優しい笑顔で挨拶をしていて、とてもかっこいいなと感じた。同時に私もあんな大人になりたいと思った。これが二つめの理由だ。

現在、高校三年生の夏は、他の誰でもない自分で自分の将来としっかり見詰め合う時間が遥かに増えた。高校受験の時よりも重大な人生の決定をしなければならぬという状況で、何をやりたいか考えたときに浮かんできたのが図書館司書だった。そのため、今自分の志望する大学は文学部であり、図書館司書の資格が取得できる場所に絞っている。公立図書館で働くことができれば、収入も安定し、生活に安心感ももてる。図書館司書は目立つ仕事ではないため、あまり多く知られている職業ではない。しかし、本が好きで黙々と作業をするような落ち着いた仕事だからこそ、地域に馴染み、年齢関係なく色々な方と接し、多くの笑顔や元気を与えられるのだなと感じる。

自分の将来は未確定で、正直、どうなるかわからない。図書館司書にだってなれないかもしれない。しかし、図書館で出会ったお姉さんのような人に元気を与えられるような大人になりたいと強く思う。

新しい夢との出会いを

東京都立赤羽北桜高等学校 二年

稲葉真琴

私がこの学校に通いたいと思ったのは、小さい頃から料理が好きだった訳でも、頻繁に料理をしていた訳でもない。ただ漠然といつか自分のカフェを持ってみたいと思っっていたか

らである。もともと調理師として将来働こうとは思っては
おらず、普通科で勉強するより、専門学科で調理技術や食品学、
栄養学などを学んだほうが将来役に立つし、何より楽しく学
べるだろうという思いもあり、私は入学を志した。

入学してからは、実習や勉強など大変な事も多かった。し
かし今は、大変という思いよりも、楽しいという気持ちが強
い。この楽しさは、私が普通科に通っていたら味わうこと
できない楽しさだと思う。だからこそ、この学科を選んだ事
に全く後悔はなく、むしろ良かったと思う。この学校に通っ
ているおかげで、漠然とした夢ではなく、しっかりと目標に
できる夢と出会うことができた。

その夢というのは、栄養士になり、多くの人に食を通して
笑顔になってもらうことだ。調理師として人を笑顔にするの
も、とても魅力的だが、私は将来、自分が調理師として働く
姿より、栄養士として働く姿の方が明確に想像することがで
きた。笑顔になるには「健康」であることが大切だからだ。
だからこそ私は、栄養士として、人を笑顔にしたいと思った。

また、私は美味しそうに食事をしている人がとても好きだ。
見ているだけでお腹いっぱいになるような気がする。なによ
りも、その笑顔が嬉しいし、とても幸せだ。私が、美味しそ
うに食事をしている人が好きだと気がついた出来事がある。
それは、「総合調理」という科目で行う、スクールレストラ
ン運営だ。大量調理を目的とした科目で、学校の生徒へ向け
て調理する。私はその中でサービスマも担当した。来て頂いた
方の対応をしている際、私は多くの笑顔を見たと、「美味しい」
という声を聞いた。もちろん、私達が一生懸命作った料理だ

からとても嬉しかった。なにより、もっとその笑顔を見たい
と思った。

しかし、生きている人全員が食を通して笑顔になってはい
ないのだと思う。健康のために食事を制限していて満足に食
べることのできない人や、アレルギーがあり食べたいものを
思う存分に食べられない人、嫌いなものでも健康のために
嫌々食べている人などは、食を通して笑顔になることは少な
いのではないかと思う。

私はそんな人達にも、食を通して笑顔になって欲しい。不
安や嫌なことがあったりする中で、食事を通して嬉しく、幸
せな気持ちになれば少しでも不安だったり嫌なことも紛らわ
せることができると思う。食にはそれくらい大きな力がある
と私は信じている。

だからこそ私は多くの人を、食を通して笑顔にできる栄養
士になりたい。そのために、これからも調理師としての技術
を学び、卒業後は、栄養士になるための勉強をしたい。そし
て栄養士としての知識と、調理師としての知識を生かして「美
味しくて栄養面にも良い食事」を作れるようになりたい。

せっかく出会うことのでき
た夢だから、どれだけ大変な
道のりでも、絶対に叶えたい。



何より大切なこと

東京都立赤羽北桜高等学校 二年

佐々木 心 那

私は今、調理を学ぶ学校に通っている。将来は、料理人になりたい。そのため調理師養成施設として認められており卒業と同時に調理師免許が取得できる科で調理に関する知識や技術を学んでいる。

私が料理人を目指したきっかけは、家族が私の作った料理をおいしいと喜んでくれたからだ。料理は相手を幸せにすることができると知った。自分にとっても、人に喜んでもらえることは、幸せなことだと気づき、料理が好きになった。

だから、もっとおいしい料理を作れる人になるために、この学校を選んだ。学校では、調理を実際に行う調理実習や大人数に料理を作る総合料理実習。また、栄養や食品衛生などの食に必要な技術や知識を学んでいる。当然ながら、高校を卒業するために必要な「数学A」や「論理国語」などの普通科目もしっかりある。だけれども、このように、高校生のうちに調理を学んでいけることは、いいことだと思う。早く基本を学べるからこそ、より多くのことを知ることができる。そのため、とても楽しい。調理実習などの実習や座学以外にも、ホテルに行ってテーブルマナーを学ぶこともある。夏休みには、五日間インターンシップに行かせて頂いた。私の中で、一番印象に残っていることは、インターンシップだ。

私は、高校を卒業したら、就職しようと思っている。しかし、「すぐに働くことは、まだ早いかもしれない」という不安と迷いがあった。しかし、今回のインターンシップに行ってみて、やはり、就職したいと思った。なぜなら、何より、楽しかったからだ。たった五日間で、簡単な作業だけをさせて頂いたからかもしれないが、現場で働くことに、とてもわくわくした。私が行かせて頂いたホテルのお店は、ビュッフェスタイルで食事を提供していた。そのため、客前と調理場で見える景色が違った。客前は、温かい色の照明で照らされており、出来立ての料理が綺麗に並べられていて、お店全体がキラキラと輝いて見えた。また、調理場は、常に清潔感が保たれており、現場の皆さんが声を掛け合い、スピーディーに作業が行われていた。

特に印象的だったのが、「お客様からふと聞こえた声は何より嬉しい」と料理長さんがおっしゃっていたことだ。客前で作業をしていると、「綺麗ー!」「これ美味しいからオススメだよ!」と、お客様達が、目の前で笑顔に料理を選んでる姿が見える。こんな風に楽しみにして来てくださるお客様がいて、その期待を超えるために、新しいメニューを考案したり、盛り付けや料理を取りやすくしたりと、徹底的に準備をし、お客様に満足してもらえる日にすることは、とてもかつこよく、素敵だなと感じた。今回、インターンシップをさせて頂いて、おいしい料理を作ることが大切であると同時にお客様に喜んでもらえることが、何より大切なことだと実感した。

そのためにも、挨拶は、欠かせないと思った。インターンシップが始まる前は、不安だった。けれども、ホテルに入っ

てから、すれ違う方、現場にいる皆さんと挨拶を交わしている内に、不安は消え、力をもらえたような気がした。そのため、「いらっしやいませ。」「ありがとうございます。」「は、すごいパワーを持っていると感じた。だからこそ、しっかり気持ちを込めて伝えることが、大事だと気付いた。

インターシップを通して、技術面でも、あらゆる経験をさせて頂き、私にとって貴重な体験になった。挨拶やお礼など、コミュニケーションを取り、連携し合う現場は、一人一人の力から成り立っていることを実感した。その上で、お客様に喜んでもらえることが、何より大切で、嬉しいことだと実感した。私はこれからも、インターシップで学んだこと、授業で学んできた大切なことを心に刻み、これからも、相手を喜ばせられる人になるために、新しいことに挑戦していきたい。

将来の夢

愛国高等学校 三年

昆野里音

私の夢は看護師になることです。私の思い描く看護師とは、医療関係者の方々の援助をし、病気を発見、予防できるような関わり方ができる存在です。また「心」を常に大切にし、辛い、悲しいよりも、幸せな気持ちを患者様に与えられる存在でいたいと考えています。私は高等学校の衛生看護科で看

護について勉強し始めて、三年が経とうとしています。

看護師になりたい理由は様々ありますが、大きなものが二つあります。一つめは、幼い頃の体験があったからです。病気になった際に心細かった中で、看護師の方が優しく接してくださったことを覚えています。安心した気持ちと共に、子供ながらに素晴らしい職業だと感じました。そこから「看護師」という仕事に興味を抱きました。二つめの理由は、祖父の存在があったからです。今年、祖父はこの世を旅立ちました。病気の診断を受けてから、徐々に弱っていく姿、何度も入院を繰り返し、苦しむ姿を目の当たりにしました。コロナウイルスの影響により面会が思うようにできない中、様々な管を付けた祖父は、苦しく心細かったと思います。私にできたことはなかったか、今後このように出くわした時に少しでも役に立てるよう、看護師になりたいと強く考えるようになりました。

そんな私には思い描く理想像があります。一つめは、医師が患者様の治療を行いやすいような援助ができる人です。患者様は病を見つけ、治し、予防するために病院等へ足を運んでいます。その気持ちに適切に応えるためには、医師の診察などを行いやすい環境作りが必要です。勿論病院には医師だけでなく、沢山の医療従事者がいらっしやいます。検査の予約や情報の共有、時には緊急時の対応も求められます。私は看護について学ぶ中で、大変で辛いと感じることも幾度となく経験してきましたが、私の目指す看護師は習っている知識を全てしっかりと身につけ、様々な物事に対応出来るようにしなければなりません。しっかりと努力を続けていきたいと

考えています。二つめは、患者様に笑顔を与えられる人です。患者様は、病に接しマイナスの感情の中で無気力になることもあるかと思えます。しかしそれが少しでもプラスの感情になれば、医療行為にも積極的になり、病気の治癒に繋がるのではないかと思うのです。私も幼い頃病院を訪れた際、病気の辛さや心細さが重なって不安でした。その時勇気や心の温かさを与えてくれ、落ち着いて診察を受けることができたのは、看護師の方の存在があったからです。私も患者様に笑顔と安らぎを与えたいという気持ちで溢れています。この理想を叶える為には、多くの人と関わりや正しい知識の獲得を通して感性を磨き、私自身が余裕を持った行動ができることが大切だと考えています。状況に応じてというのは勿論のことですが、自分が笑顔を大切にして相手の立場で考える柔軟な感性を磨き、患者様に安らぎを与えられる看護を提供したいです。その為に、多くの人と関わりをこれからもっと大切にしたいと考えています。

今私は日々の実習を通してより夢へと近づいていることを実感しています。実習をさせて頂く中で、時には逃げだしたくなることがありましたが、周囲の支えがあり、乗り越えることができています。落ち込むこともある一方、上手くできた時は嬉しくなりますし、患者様から感謝の言葉を頂くと、勇気を貰え、次へのモチベーションになります。私達の為に協力して下さる医療従事者や患者様に感謝をし、自分の目指す看護師に近づけるように精進していきたいと思えます。実社会をイメージして、諦めたり、甘えたりしないでしっかりと責任感のもとで努力を積み重ねたいです。現在の実習が終了すると、私達は二月

に准看護師の資格取得試験が控えています。実習で学んだことを糧に、同じ夢を抱いている友人と共に、まずは資格試験に向けて一層勉学に励んでいきたいです。

私の夢

愛国高等学校 三年

谷 口 なご美

私は今、衛生看護科の生徒として学んでいます。三年生になり臨地実習をさせて頂く時間が多くなりました。将来の夢である看護師に向け、着実に学ぶことが出来ている今、実習で学んだことや今後の目標について書いていこうと思います。

まず私が看護師を目指したきっかけは二つあります。一つめは、小学生の頃よく見ていたドラマに影響を受けたことです。当時放送していた医療系ドラマで描かれた看護師のてきぱきと仕事をこなす姿、患者様一人ひとりに向き合う姿、他職種と連携し困難を乗り越える姿に憧れを抱きました。二つめは、病院で接して下さった看護師さんの対応に憧れたことです。弟を出産するため母が一時入院をしました。家族と病院を訪れた際に話をした看護師さんが明るく話して下さいました。おかげで、私達の不安な気持ちも少し和らぎました。私は目の前のことに精一杯になる性格です。周囲へも気を配り寄り添うことが出来る看護師の姿は、格好良いと思えました。人に寄り添い、役に立てる看護師に憧れを抱いたのでした。

現在させて頂いている実習の中で、初めて患者様を受け持たせて頂いて学んだことは、コミュニケーション能力を高める大切さです。病院実習二日目のこと。受け持ちする患者様へまず挨拶をさせて頂くため病室へ行きました。私の中では、挨拶とともにコミュニケーションをとって患者様との心の距離を縮めること、実習にあたり私のことを覚えて頂くことが目的でもありました。実習させて頂くことを同意して頂き、挨拶をするところまでは、順調に出来たように思いますが、しかし、その後どのように会話を進めようか迷い、「趣味は何かありますか」と咄嗟に口にしました。すると患者様は「しみの数ね、最近しみが増えてきてね。」という言葉と共に、自分のしみの数を数え始めてしまいました。上手く伝わっていないのです。簡単に考えていた私は、会話が成り立っていないこと、患者様に不快な思いをさせてしまったことにとても焦り、申し訳ない気持ちになりました。今考えると、患者様との初めての会話に緊張しすぎていた気がします。最初は何から話そうか、患者様にはどう返事をすれば良いのか、患者様の隣に座っても良いのかなど少しパニックになっていました。何か話さなくてはいけない、話をなるべく長く続けようという思いが先走り、伝わりづらい患者様との会話に対する配慮が何も出来ていなかったのだと反省しました。その出来事の対処法はどのようなことがあるか、実習担当の先生や、実習グループの仲間にも相談し、その後指導者さんにも質問すると、指導者さんからは「患者様が聞き取りやすい側から、聞こえやすい声のボリュームでゆっくりと患者様の目を見て会話すると良いですよ。」と教えて頂きました。

た。また仲間からもアドバイスをもらいました。この出来事から医療の知識や臨床スキルを習得するだけでなく、コミュニケーションやチームワークなども大切だと学びました。このような実践的な実習経験を通して、緊張感の中でも冷静に対応し、患者様との信頼関係を築けるように努力していきたいと思えました。もちろん看護師として働くために必要な知識や技能を学び続けたいです。

看護師として働く上で、辛いことは避けられないかもしれませんが。プレッシャーを感じることもあります。しかしその反面、患者様との良好な関係を築くことや健康を支えることには大きなやりがいを感じると思います。私の今後の目標は、患者様の不安や痛みを出来るだけ取り除き、より良い治療や健康的な生活を促すことが出来るような看護を提供出来る看護師になることです。知識を常に深めることはもちろん、患者様が安心して治療を受けられるよう、個々に合わせたケアを提供し、患者様やご家族から信頼され、感謝の言葉を頂けるような看護師になりたいと思っています。



理想の鉄道員をめざして

岩倉高等学校 二年

福原優和

私の夢、それはたくさんの人を笑顔にする鉄道員になることです。私は、幼い頃から旅行や外に出かけることが好きで、家族や友達と鉄道を使ってよく遊びに出かけていました。あの日のことですが、鉄道員の仕事について意識するきっかけとなった出来事がありました。私は友達と一緒に江ノ島に観光に行っていました。その帰り道、駅の改札を出るときに、使った切符を持ち帰ろうという話になり、有人改札を通ることにしました。しかし、私を含め数人のメンバーはすでに自動改札で機械の中に切符を入れてしまっていました。私も、みんなと同じように切符を持ち帰りたいと思いましたが、もう使った切符は改札機の中に吸い込まれてしまいました。時すでに遅し。残念だけど諦めるしかない。そう思いましたが、ダメ元で駅員さんに話をしました。すると、思わぬ回答が返ってきました。「分かりました。ちょっと機械を開けて探してみますね。」その後、わざわざ改札機を開いて中から切符を探してください、見つかった切符に記念スタンプまで押していただきました。この体験から、鉄道員の仕事は安全な輸送を守ることにとどまらないのだと知り、人々を笑顔にするこの仕事に就きたいと考えるようになりました。

現在の高校には、企業の方々のご協力を得て、駅で現場実

習をさせていただくというものがありません。私も、夏休み期間に実習に参加し、実際に改札付近でお客さまのご案内をさせていただきました。その駅は、国籍を問わず多くの人が行き交うターミナル駅でした。実習初日、スーツケースを引いた海外からのお客さまに話しかけていただくことが多くありました。お客さまに間違ったご案内をしてはいけないという緊張から、言葉に詰まってしまい、私は思うように言葉を返すことができませんでした。初日を終えても、このことはずっと心の中に引っかかっていた。もっとお客さまに分かりやすく伝えるにはどうしたら良いか。今日一日の自分を振り返ると、お客さまに正確に伝えようとするあまり、どのように言ったら良いかということばかりを考えていた自分がいたことに気付きました。そんな反省に至った私は、二日目の実習では、お客さまのことを考え、言葉以外でも「伝える」と意識しました。言葉だけではなくジェスチャーも使い、お客さまにイメージで伝えられるようにしました。すると、海外からいらしたお客さまに伝わるが増え、お客さまの満足げな表情も見られました。私はこのとき、海外のお客さまとのコミュニケーションでは、「いかに言葉で伝えようとするか」よりも、伝えようとする「情熱」が大事なのだと実感しました。このことで自信をもった私は、お客さまがこの場を後にするときに、英語で「良い一日をお過ごしください。」という一言を添えるようにしました。するとたくさんのお客さまから、とびきりの笑顔で「アリガトウゴザイマス。」という言葉をいただけるようになりました。その瞬間、胸がいっぱいになり、私まで笑顔になりました。

私は、今回の実習を通して、コミュニケーションについて多くのことを学ばせていただきました。お客さまとの意思の疎通のために、言葉のコミュニケーションは不可欠ですが、人を笑顔にする接客では、心と心のコミュニケーションが行われているのだと感じました。心と心のコミュニケーションは、年々増加するインバウンドの方々に、「また日本に来たい。」と思っただけのためにも大切だと思います。このことは、今後の観光産業の発展にもつながると考えました。

だからこそ、これから夢に向かって歩いていく自分に対して伝え続けたいと思います。「心と心が通じあう」そんなコミュニケーションが出来ていますか、と。

私の学びと夢

昭和第一学園高等学校 三年

渡 邊 悟

私は通っている高等学校の『自動車研究部』に所属しています。その活動を通じて色々なことを見て聞いて、体験したことで、自分自身が成長できたと実感した体験が数多くあります。

例えばエコランカーレースに参戦したことが挙げられます。その中で、自動車工学を筆頭に、機械工作全般の知識や技術を、ものづくりを通して身に付けることができました。自分たちでリッターカーを一から製作する場合、工学の

幅広い知識や技術が必要となります。私自身、最初は道具の使いどころか、道具の名前すら解らない状態でしたが、自動車の部品を作る過程で、材料を切る、削る、タップを切るなどの切削加工の基本を、徹底的に繰り返し学びました。このように一年生の時から様々な作業を経験しながら毎日の部活動に夢中で取り組んでいました。段々と自分のできる作業が増え、周囲から大事な作業を任せてもらえることが多くなり、それが自信となっていきました。

作業の中でも特に難しく大変なのが、エコランカーの「ボディー製作」と「メーターパネル」の製作です。その中でも、私は「ボディー製作」の作業が一番記憶に残っています。

当時の現場では、試走中の車体がカーブを曲がり切れないといった、ハンドルの切れ角に課題を抱えていました。検討を重ねた結果、フロントフェンダーを拡張し、タイヤの可動域を拡げるということになりました。そしてその作業を私が担当することになりました。何度か先生や先輩方にアドバイスを受けましたが、ほぼ私一人で修正に取り組み、何とか課題を解決することができました。

自分たちで製作したエコランカーで、試行錯誤を繰り返して、培った経験を活かしながら直前まで調整を加えていきました。実際のコースに立ち、自分で運転してレースに参戦し、結果入賞できたことは、言葉では言い表せないくらいに感無量でした。

この経験は私にとって大きな出来事であり進路を考えるきっかけとなりました。

私は部活動を通じて、自分自身の知識や技術以外にも、周

困との協調性や、決して諦めない前向きな姿勢など、これから社会の場で働く身として必要な力を身に着けることができたと実感しています。そして何よりも幸せだと思えることは、私が大好きな自動車関連の勉強を伸び伸びと、やりたいようにできたことです。

自動車研究部の活動を通して、私はエンジンなどの内燃機関の研究に興味を持ちました。より具体的に仕組みの理解を深めるため、今はエンジンの分解・組立・整備を中心に活動しながら、「既存の内燃機関のエネルギー効率をどれだけ高められるか」という研究テーマに取り組んでいます。私たちの製作したエコランカーは、五〇CCのエンジンで、一リットルあたり一八〇〇キロ近く走ることができます。

これらの技術や経験を活かして、高校卒業後は大学の工学部へ進学し、現代社会の課題でもある低燃費車の内燃機関について研究を続けていきたいと考えています。

その中でも新しい燃料を使用した効率が良いエンジンの開発など環境にやさしい方法を大学で研究し、今までにない方法を考えたいと思っています。

そして将来、私は自動車メーカーに就職し、いつか自分で設計したエンジンを世の中へ送り出して社会へ貢献することが私の夢です。



専修学校の部 優秀賞

私になりたい将来像

青山製図専門学校 一年

問 貞子

私は働く意味はお金を貰うためで、お金は生きていく上で必ず必要だから働くしかないと思っていました。働くことに対して圧倒的にマイナスイメージがあった。それが年齢を重ねるにつれ家族と仕事の話をするようになって少しずつ考えが変わった。

私の母は外で働きながら家のこともする超人だ。父と結婚してすぐ父が海外に異動が決まるとついていき、姉と兄を産んだ。日本に戻ってきてからは、私が幼稚園に入園して少し経ってから仕事を再開していた。私の記憶に、家が汚かったり外食ばかりだった記憶はない。家事をすることも働くという事に含まれると思う。でも家事をしたからといってお金を貰えるわけじゃない。母には尊敬することばかりだ。そんな母が去年働きながら専門学校に通い、新しく国家資格である社会福祉士の資格をとって、今はそれを活かして働いている。私は大人になっても学び続ける母に、どうして資格をとって新しい道に進むのか聞いた。母は「福祉は人が足りてないんだって。でも福祉は絶対必要だから」と言った。母は資格をとる最中、介護センターで働いていた。「介護の世界では

ママは若手なんだよ」そんな風に笑いながら言っていた。正直福祉の仕事はあまりお給料がいいわけではないらしい。でも誰かが必要としていて、なくてはならない仕事。母は今区役所で一人暮らしのご老人に困った事がないか、社会から孤立してしまわないように家を訪問し話を聞く仕事をしている。「お金すごい沢山貰えるわけじゃないけど、それ以上に会いに行った人が笑顔になったり頼ってくれたりしたら嬉しいやりがいを感じるよ。もちろんお金貰えなきゃできないけど」という母をすごくカッコイイと思った。もちろんお金も大切だと思うけど、きつとそれと同じくらいかそれ以上にやりがいを感じられることも大切なのだと感じた。

私の姉も人と関わる仕事をしている。姉は学童の先生をしている。見ていてすごく大変そうだ。家に帰ってきてからも仕事をしている時がよくある。以前までの働く事とお金のためだけだと考えていた私ならきつと耐えられないと思う。でも姉は「大変なことも沢山あるけど子どもは超可愛いし用意した遊びを楽しそうにやってくれたらすごい嬉しい」と言っていた。姉も母と一緒に自分の仕事にやりがいを感じていて誇りを持っていた。

もちろん仕事は楽しい事ばかりではないのだと思う。実際、仕事の話や聞くに悩んでいることも沢山あるようだ。でも、それも含めてやりがいに感じられているのだと思う。

正直自分が建築系の職業で働いているビジョンは今はまだ見えていない。仕事に対してきつと人それぞれ求めているものは違うのだと思う。もしかしたら以前の私のようにお金のためだと割り切って働いている人もいるのかもしれない。で

も私はアルバイトをしていて、お金を貰えるからといってなんでも我慢できるわけじゃない。やりがいを感じたいし誰かから必要とされる仕事だったら嬉しい。私が今就きたいと考えている仕事は母や姉と同様、人と関わる仕事だ。私が就きたい仕事はお客様がいなければ成立しない。今まだ働いていなくて、学校に通っている最中でさえ逃げ出したくなる時もある。でも人に感謝されたり喜んで貰えるように、今は吸収できるものは全部自分の中に吸収したいと思う。まだ社会に出たことがないちよつと未知の世界だけれど、仕事はお金のためだけじゃなくて、やりがいを感じたり頼りにされたりお金以上のものがあるのだと私は最近思う。私は沢山の人に喜んで貰えるような幸せを運べるような人になりたいし、そうできるように働きたいと思う。

私の目指す道と想い

青山製図専門学校 一年

山本 駿介

私は、幼い頃からものづくりに興味があり、地域に貢献できる町づくりを実現することを目標に建築について学んでいく。

私が、このような目標を抱いている理由は、生まれ故郷である鹿児島県出水市の景色に魅了されたからである。日本一の鶴の渡来地で広く知られ、田んぼや山に囲まれた自然豊かな

な町である。また、国の文化財に指定された武家屋敷などが多く残っている。私は、そこに行くたびに心が癒され、「この風景や自然を守りたい。」「この町の役に立ちたい。」という思いが強くなる。幼い頃から好きだったものづくりを建築という分野に活かし、学んでいる現在、その思いは一層強くなっている。

一方で、そうした故郷への思いの背景には高齢化も影響している。出水市では、高齢化率や高齢者のみの世帯の増加が問題になっている。これはこの町に限らず社会的な問題であり、地方を中心に深刻化している。また、建築を学んでいる私にとって、建設従事者の高齢化や人手不足は身近な課題である。建設業に及ぼす影響については、高度成長期に整備された社会インフラの老朽化が深刻さを増し、人員不足で対応しきれないといったことが挙げられる。また、技術を継承するための人材育成にも影響が出るなどの課題が多くある。

近年は、そうした高齢化や人手不足に加えて、自然災害による被害も多く見られ、建設業に求められる役割も大きくなってきている。私の記憶に残る災害がある。それは、二〇一九年九月、千葉県を中心に大きな被害をもたらした「台風十五号」である。この台風で、千葉県では八万二千棟を超える住宅被害が発生した。住宅の瓦は飛散し、県内外からブルーシートを集め、応急措置が行われた。他にも、倒木や停電、断水等多くの被害に遭った。私が印象的だったのは「業者不足」という言葉だった。ここにも、建設に携わる人の高齢化等が影を落としていた。また、後継ぎ不足で廃業する瓦職人も多

く製造が間に合わないという問題もあった。この時、私は高校一年生であり、建築の勉強はまだしていなかった。しかし、心の中で「修理を手伝いたい」「何か役に立ちたい」という思いがあった。

専門学校に入学して半年が過ぎた現在も故郷への思いは変わらず、建築の専門学校への進学が実現したときは、早く建築の知識・技術を身に付けて故郷の役に立ちたいという気持ちや目標で胸がいっぱいだった。その思いは普段の学習の意欲に繋がっていった。入学当時、担任の先生から「専門学校は学習が職業に直結する職業訓練校でもある。」という話を聞いた。私はその時改めて、建築の道へ進むことへの責任の重みを実感した。中途半端ではいけないのだと。授業が本格化してきた四月後半、建築物の構造や環境、設備などすべてが初めて知るものばかりでわくわくしていた。徐々に建築分野についての疑問を持ち、先生に質問する機会が増えていった。この知識が高齢化や人手不足を抱える建設業界の力になると思うとやる気が出た。

私は、前述したように「地域に貢献したい」という思いからこの道に進んだ。建築について日々、知識や理解が深まっていることに喜びを感じている。一方で建設業界に限ったことではないが、高齢化や人手不足は進行し、そこに災害などの被害が追い打ちをかけ、深刻さを増していく。その中で、学校で得た知識・技術を故郷や地域、人のために役立て問題の解決に積極的に貢献していきたい。

イラストの部 最優秀賞



品川区立鈴ヶ森中学校 九年
宮田 優璃

イラストの部 優秀賞



江戸川区立二之江中学校 一年
前原 椎花



品川区立鈴ヶ森中学校 九年
若井 佐和子

令和5年度作文コンクール応募校等一覧（応募者数・入選者数）

〈中学校の部〉

番号	区分	学校名	応募者数	入選者数
1	千代田区	九段中等教育学校	1	
2	中央区	銀座中学校	5	
3	新宿区	西早稲田中学校	3	
4	墨田区	両国中学校	9	3
5		吾嬬第二中学校	6	
6		吾嬬立花中学校	10	
7	江東区	第四砂町中学校	1	
8	目黒区	第七中学校	1	
9	大田区	大森第六中学校	6	
10	世田谷区	烏山中学校	3	
11		喜多見中学校	1	
12		三宿中学校	10	1
13	中野区	中野中学校	6	2
14	杉並区	松溪中学校	1	
15	北区	稲付中学校	4	2
16		赤羽岩淵中学校	10	4
17	荒川区	南千住第二中学校	6	1
18	足立区	第十三中学校	3	
19		江南中学校	3	1
20		伊興中学校	10	1
21	江戸川区	松江第四中学校	4	1
22		二之江中学校	9	1
23	調布市	第八中学校	10	2
24	町田市	真光寺中学校	10	1
25	東京都	大泉高等学校附属中学校	6	2
26	私立	愛国中学校	1	
合計			139	22

〈高等学校・専修学校等の部〉

番号	学校名	応募者数	入選者数
1	東京都立園芸高等学校（全日制）	10	
2	東京都立園芸高等学校（定時制）	7	1
3	東京都立農芸高等学校	7	1
4	東京都立農産高等学校	9	2
5	東京都立農業高等学校	10	4
6	東京都立瑞穂農芸高等学校	10	4
7	東京都立大島高等学校	3	
8	東京都立八丈高等学校	5	
9	東京都立第三商業高等学校	6	1
10	東京都立第四商業高等学校	5	
11	東京都立葛飾商業高等学校	10	
12	東京都立忍岡高等学校	6	
13	東京都立赤羽北桜高等学校	10	2
14	愛国高等学校	6	3
15	岩倉高等学校	3	1
16	蒲田女子高等学校	9	
17	京華商業高等学校	4	
18	昭和第一学園高等学校	1	1
19	国際共立学園高等専修学校	10	
小計		131	20
1	青山製図専門学校	10	2
2	中央工学校	1	
小計		11	2
合計		142	22

〈まとめ〉（イラストの部を除く）

番号	区分	応募校数	応募者数	入選者数
1	中学校	26	139	22
2	高等学校	19	131	20
3	専修学校	2	11	2
合計		47	281	44

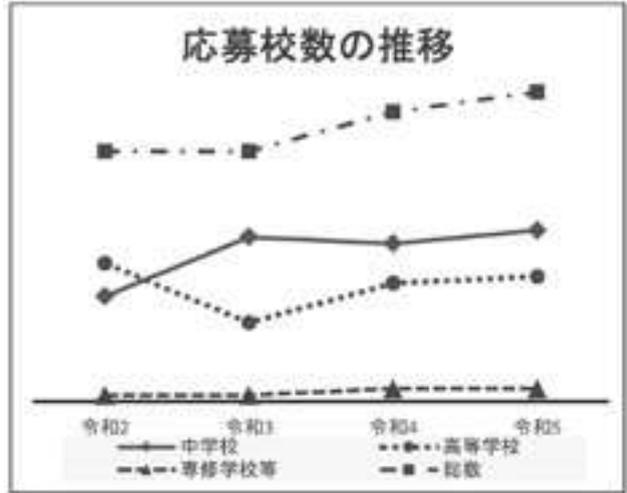
〈イラストの部〉

番号	学校名	応募者数	入選者数
1	品川区立鈴ヶ森中学校	3	2
2	足立区立伊興中学校	5	
3	江戸川区立二之江中学校	3	1
4	町田市立真光寺中学校	4	
合計		15	3

応募校数・応募者数・入選者数の推移

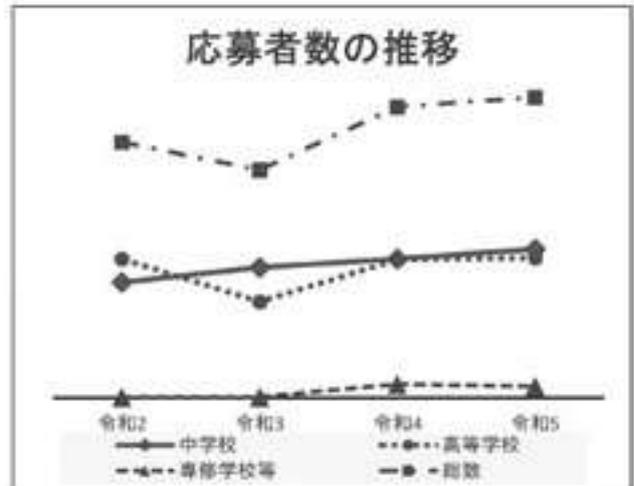
1 応募校数の推移

校種	令和2	令和3	令和4	令和5	平均
中学校	16	25	24	26	23
高等学校	21	12	18	19	16
専修学校等	1	1	2	2	2
合計	38	38	44	47	42



2 応募者数の推移

校種	令和2	令和3	令和4	令和5	平均
中学校	108	122	130	139	125
高等学校	130	90	129	131	120
専修学校等	1	1	13	11	7
合計	239	213	272	281	251



3 入選者数の推移

校種	令和2 (2020) 年度			令和3 (2021) 年度			令和4 (2022) 年度			令和5 (2023) 年度			平均 %
	応募者数	入選者数	%	応募者数	入選者数	%	応募者数	入選者数	%	応募者数	入選者数	%	
中学校	108	18	17	122	19	16	130	20	15	139	22	16	16
高等学校	130	20	15	90	14	16	129	20	16	131	20	15	15
専修学校等	1	1	100	1	1	100	13	2	15	11	2	18	58
合計	239	39	16	213	34	16	272	42	15	281	44	16	16

作文のテーマ別応募者数一覧

1 作文の内容

次に示す学習を通して体験したことを踏まえて、そこから得た人生観・職業観、自己の将来に対する考え方・心構え等について述べたもの。

- 中学校における技術・家庭科の学習
- 高等学校、専修学校、高等専門学校又は短期大学における専門教科の学習
- 勤労に関わる体験的な学習

2 テーマ

作文の内容について、次のテーマ番号（ア～コ）から関係するものを選択し記述する。

- ア 授業等を通して学び得たこと
- イ 就業体験や現場実習等によって学び得たこと
- ウ 職場体験やボランティア活動等によって学び得たこと
- エ つくることの喜び、ものづくりの喜び
- オ 働くことの喜び
- カ 学習に対する心構え
- キ 私の生きがい
- ク 私の進路、将来の夢
- ケ 私の職業観
- コ その他（産業教育に関わる内容のもの）

3 テーマ別応募数とその割合

テーマ 番号	中学校の部			高等学校の部			専修学校等の部		
	令和3年度	令和4年度	令和5年度	令和3年度	令和4年度	令和5年度	令和3年度	令和4年度	令和5年度
	応募数 (割合)	応募数 (割合)	応募数 (割合)	応募数 (割合)	応募数 (割合)	応募数 (割合)	応募数 (割合)	応募数 (割合)	応募数 (割合)
ア	23 (19%)	19 (15%)	16 (12%)	27 (30%)	35 (27%)	31 (24%)	0 (0%)	3 (2%)	4 (3%)
イ	0 (0%)	2 (2%)	10 (7%)	7 (8%)	11 (9%)	21 (16%)	1 (100%)	0 (0%)	0 (0%)
ウ	13 (11%)	19 (15%)	44 (32%)	3 (3%)	1 (1%)	8 (6%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)
エ	13 (11%)	10 (8%)	11 (8%)	3 (3%)	6 (5%)	7 (5%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)
オ	4 (3%)	3 (2%)	7 (5%)	0 (0%)	2 (2%)	4 (3%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)
カ	2 (2%)	3 (2%)	7 (5%)	3 (3%)	4 (3%)	5 (4%)	0 (0%)	0 (0%)	1 (1%)
キ	12 (10%)	6 (5%)	5 (4%)	6 (7%)	10 (8%)	8 (6%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)
ク	45 (37%)	55 (42%)	31 (22%)	36 (40%)	51 (40%)	41 (34%)	0 (0%)	4 (31%)	4 (30%)
ケ	5 (4%)	11 (8%)	8 (6%)	1 (1%)	6 (5%)	3 (2%)	0 (0%)	6 (46%)	2 (18%)
コ	5 (4%)	2 (2%)	0 (0%)	4 (4%)	3 (2%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)
計	122 (100%)	130 (100%)	139 (100%)	90 (100%)	129 (100%)	131 (100%)	1 (100%)	13 (100%)	11 (100%)



令和5年度「作文コンクール」募集要項

1 趣 旨

東京都産業教育振興会の会員校である東京都内の中学校、中等教育学校、義務教育学校、高等学校、専修学校、高等専門学校及び短期大学等に在籍する生徒・学生を対象に、産業教育に関する作文の募集を通して、専門教科の学習や勤労への興味・関心や意欲を喚起し、将来の職業人の育成を図り、もって東京の産業教育の振興と発展に資する。

2 主 催

東京都産業教育振興会

3 後 援

東京商工会議所

4 作文の内容

中学校の技術・家庭科若しくは高等学校や専修学校等における専門教科の学習、または勤労に関わる体験的な学習を通して体験したことを踏まえて、そこから得た人生観・職業観、自己の将来に対する考え方・心構え等について述べたもの。

【テーマ】

作文の内容について、次のテーマ番号（①～⑩）から関係するものを選択して応募票の欄に記入する。

- ①授業等を通して学び得たこと
- ②就業体験や現場実習等によって学び得たこと
- ③職場体験やボランティア活動等によって学び得たこと
- ④つくることの喜び、ものづくりの喜び
- ⑤働くことの喜び
- ⑥学習に対する心構え
- ⑦私の生きがい
- ⑧私の進路、将来の夢
- ⑨私の職業観
- ⑩その他（産業教育に関わる内容のもの）

5 作文の題名

作文の内容に沿った「題名」を付ける。

6 応募資格

(1) 中学校の部

東京都内の中学校、中等教育学校の前期課程、義務教育学校の後期課程（東京都産業教育振興会の会員校に限る。）に在籍する生徒

(2) 高等学校・専修学校等の部

東京都内の高等学校、専修学校、高等専門学校及び短期大学等（東京都産業教育振興会の会員校に限る。）に在籍し、産業教育に関する教科・科目を履修している生徒及び学生

7 応募期限

令和5年9月13日（水）

8 応募方法

(1) 作成上の注意

ア 原則として所定の原稿用紙またはA4判の400字詰め原稿用紙（20字×20行・縦書き）を使用する（パソコン等で作成した原稿も可）。なお、生徒指導上の都合で、B4判400字詰め原稿用紙（20字×20行・縦書き）を使用することは可とする。

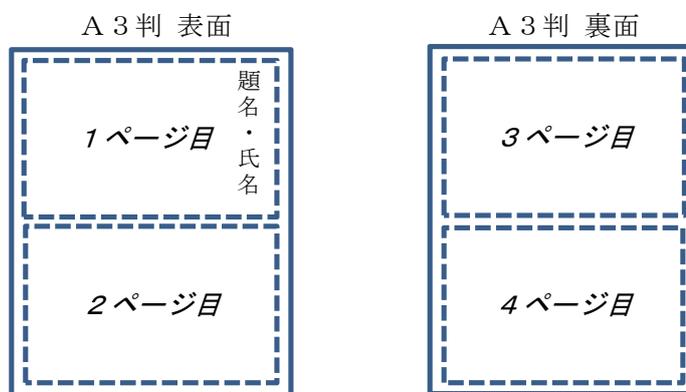
- イ 原稿用紙の1枚目右端余白に題名と氏名を書く(校名、学科名、学年等は書かない)。
 - ウ 原稿の文字数は、1200字以上1600字以内とする(改行による空白は、字数に含める。字数等に過不足がある場合は選外となるので注意すること)。
 - エ 原稿の欄外右下にページ数を記載する。
 - オ 自筆で作品を書く場合はHB以上の濃い鉛筆等を用いて、丁寧かつ鮮明に書くこと。
- (2) 提出物

ア 作文原稿(原本)

【生徒ごとに】**1部**(原本の上に応募票を付けて、左上をステープラーで止める。)

イ 作文原稿(コピー)

【生徒ごとに】**3部**(A4判の原稿用紙を用いた場合には、順番に並べてA3判両面印刷し提出する。両面印刷ができない場合は、それぞれ左上をステープラーで止めて提出する。作文原稿にB4判を用いた場合には、必ずA4判に縮小コピーして印刷し提出すること。)



ウ 応募者一覧表

【学校全体で】**1部**(応募者は1校10名以内とする。ただし、複数の課程を有する学校(全定通併置校等)については、それぞれの課程ごとに1校の扱いとする。)

9 発表

入選者の氏名は11月中旬頃に関係学校長へ連絡する。また、入選者の作文は作文コンクール入選作品集『明日に生きる』(第34号)に掲載するとともに、東京都産業教育振興会ホームページに掲載する。

なお、入選作品の掲載に際し人権上の配慮等が必要な場合、事務局の判断において、その趣旨を損なわない範囲で字句の削除や修正等を行うことがある。

10 表彰

入選者に対して12月中旬頃に表彰式を行い、本会より賞状及び賞品を授与する。なお、選外者には参加賞を贈呈し、学校長宛てに送付する。

11 その他

- (1) 応募作文は、未発表のものであること。
- (2) 応募作文は返却しない。
- (3) 応募作文の著作権は、東京都産業教育振興会に帰属するものとする。
- (4) 作文中には個人名や具体的な店名、事業所名は記載せず、一般的な名称を記載するようにすること(例: ○○保育園→保育所、△△△イレブン→コンビニ)。

12 提出物の送付先及び問合せ先

〒163-8001 東京都新宿区西新宿2-8-1 都庁第二本庁舎15階北側
 教育庁都立学校教育部高等学校教育課内 東京都産業教育振興会「作文コンクール」担当
 電話 03(5320)6729

令和5年度 作文選考委員名簿 (順不同・敬称略)

中学校の部

委員長	世田谷区立三宿中学校	校	長	濱川 一彦
委員	港区立三田中学校	校	長	上原良枝
委員	台東区立駒形中学校	校	長	渡邊 和彦
委員	品川区立鈴ヶ森中学校	副校長	長	大山剛史
委員	世田谷区立上祖師谷中学校	副校長	長	毛利慎治
委員	足立区立伊興中学校	校	長	千葉千登勢
委員	江戸川区立二之江中学校	主幹教諭	長	吉見啓佑
委員	調布市立第三中学校	校	長	宇田川裕美
委員	町田市立真光寺中学校	校	長	矢島加都美
委員	小金井市立小金井第二中学校	校	長	川井まさよ
委員	教育庁指導部義務教育指導課	指導主事	田中	健太郎
委員	教育庁指導部義務教育指導課	指導主事	福住	貴夫

高等学校・専修学校等の部

委員長	東京都立橘高等学校	校	長	深澤 栄次
委員	東京都立瑞穂農芸高等学校	校	長	大畑 哲也
委員	東京都立江東商業高等学校	校	長	智片 将也
委員	東京都立府中西高等学校	校	長	小川直哉
委員	東京都立晴海総合高等学校	校	長	仁井田 孝春
委員	京華商業高等学校	教務主任	小口	浩史
委員	昭和第一学園高等学校	工業部長	百瀬	公博
委員	ハリウッド美容専門学校	副校長	佐藤	和彦
委員	教育庁指導部高等学校教育指導課	指導主事	松尾	守将
委員	教育庁指導部高等学校教育指導課	課長代理	林	由美子

あとがき

はじめに、令和五年度作文コンクールで入選された生徒及び学生の皆さんに、心よりお祝い申し上げます。また、作品を応募してくださった生徒や学生の皆さん、御指導いただいた先生、厳正かつ公平に審査していただいた選考委員の皆様、さらには御後援いただいた東京商工会議所の皆様に、心より感謝申し上げます。

さて、今年度の応募は、四七校二八一作品でした。昨年度よりも全体で九作品増加しました。今年度は募集要項を改訂し、制限字数や提出方法を変更しましたが、大きな混乱はありませんでした。また、イラストの部は、中学生の応募作品の選考としました。将来への可能性と働く喜びをイメージしたものが多く、どの作品も豊かな表現力で描かれています。

なお、このたびの入選作品集を発行するにあたり、出来る限り原文を尊重して掲載していますが、人権上の配慮等が必要な場合には、その趣旨を損なわない範囲で字句を修正していますので、御了解ください。

AIの進化により情報の収集が容易になる中、自らの体験を踏まえて思考することの大切さが増しています。生徒や学生の皆さんが作文を通して自ら学ぶ意義を考え、将来の夢を実現するきっかけの場となるよう、来年度も本会の作文コンクールを実施します。会員校の皆さんから、より多くの作品が応募されることを期待しています。

結びに、この作品集が会員のみならず広く活用されることを切に願っています。

明日に生きる 第三十四号

— 作文コンクール入選作品集 —

令和六年三月一日 発行

発行 東京都産業教育振興会

〒二六三―八〇二 東京都新宿区西新宿二―八一―一
東京都教育庁都立学校教育部高等学校教育課内
電話 〇三―五三三―〇一六七二九

印刷 株式会社小葉印刷所

表彰式（令和5年12月15日、東京商工会議所）



表彰状及び賞品授与



作文朗読：中学校の部（岩崎 海春 さん）



作文朗読：高等学校の部（浪打 優 さん）



講評：中学校の部（濱川一彦委員長）



講評：高校・専修学校の部（深澤栄次委員長）



祝辞：東京都産業教育振興会
（西澤宏繁会長）



祝辞：東京都教育委員会
（長谷克己ものづくり教育推進担当課長）